



新釋令義解

四

73
6374
2



新釋令義解第四

五林河平威

五上

職員

神都 祠官 園田守長

新釋令義解

四

3
6874
2

新釋令義解

新釋令義解第四

去五味均平藏

井上賴國藏

井上

神都 祠官 園田守良 著



[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '中務省', '職員令', and '管職一寮六司三']

中務省

管職一寮六司三

職員令

卿一人掌侍從獻替贊相禮儀

謂贊助也相導也禮節也儀威儀也言

助導人君之禮義也

審署詔勅文案受事覆奏

謂依公式令詔書式御畫日者

留中務省為案別寫一通印署又依勅旨式受

勅人宣送中務省中務覆奏訖依式取署是也 宣旨

謂侍從之宣命也案單防令有所征

討發日侍從充使宣勅慰勞是也

勞問 謂勞者郊勞也

依軍防令凱旋之日奏遣使郊勞是也問者存問也

依公式令五位以上致仕身在畿內令內舍人一巡

問奏聞安

受納上表

謂凡上表者不由大政官直向中務省省受取奏進至尊也

監修國史

謂圖書寮所修此省更押監也案雜令有徵祥災異陰陽寮奏訖者季別封送中務

省入國

及女王

謂二世以下四世以上其五世者自入命婦官人之例即有品內親王亦

隸於此省為掌考課故若无

內外命婦

謂婦人帶五

品者自非仕官理然不隸也

命婦也

五位以上 宮人 謂案後宮職員令內侍以下

妻曰外命婦也

十二司女司是也其氏女御

巫縫女乳母東宮宮人嬪以上女豎

等名帳考叙位

記諸國戶籍租調帳

謂案倉庫令調庸等物應送京者皆依見送物數色目各造簿

一通此簿即納於民部省而於此省亦云租調帳即
是租調等帳各造一通更須納此省其戶籍以下諸
簿者非此省之所執
檢唯止擬御覽而已 僧尼名籍事

大輔一人掌同卿唯規諫不獻替謂以忠正君曰規以義匡主曰諫其
所獻替者大而所規諫者小事既有大
小故立制不同若無卿者亦得獻替也 小輔一人掌

同大輔

大丞一人掌宮人考課謂勘問宮人考課即與式兵部丞勘問義同也餘准

神祇大祐少丞二人掌同大丞

大錄一人少錄三人史生二十人

中務省は八省第一にて宮中の政務を專職としんも其任掌尤も重し
相當も七省より 集解小凡中務省者詔勅之所通宮中之所要故在二
一階高き此故なり 官之後在七省之前也と云り 二官は神祇官省は禁署の義なり 猶下
廢帝紀天平宝字二年八月甲子奉勅改易官號云云中務宣傳勅詔
必可有信故為信部省と改められりと同八年舊號小復まり 此格は大醫官
唐百官志小武德三年改內書省曰中書省開元元年改中書省曰紫微省中
書令曰紫微令とあり中務は此中書を摸さんふも也孝德紀天平勝宝元
年八月小大納言藤原朝臣仲麻呂兼紫微令とあり此紫微
の義を取て官號とふりしとや令外官職考り委いへり 本註此省
一職六寮三司を管領といふは中官職大舍人寮圖書寮内藏寮陰陽寮縫殿

寮書司内藥司内礼司正四上の御所より下条に見えたり此寮六は寮五の卿一人

和名抄長官の条小省曰卿加美とあり此卿字は周の代り三公九卿と見えて三公の

より比義をもて侍従献替の義は上大納言条より云々但し大納言は天下

庶事此省は御所尋常の事にて其状ふとふる常小御所より居て

替相礼儀は朝廷公事の時至尊の礼法威儀を輔け導き教へ奉るをいふ

自餘祭祀の日また大臣對揚規諫をなす事ふらむ

の時の常法をもて輔けまつる集解兼亦教誨臣子之進退也是在御所内礼

司彈正有失礼儀彈教不及此省教誨也と見えて至尊のみならず群臣の礼儀

をも兼ね御所より内礼司彈正は近く進み人臣の失を教へ彈教も

儀一同かぬ故り節級あり上下貴賤の節級ありは御所内威儀は其

容貌装束行安進退のふとせし推古紀小進止天武下紀小進止元祿亦康

小立振舞利といへり紀下威儀を布留万比といふ此義を依

即ち行粧をいふ猶下式部省小礼儀容止といふをも併せ考ふ審署

詔勅文案も内記御所にて詔勅の書を造り此省より送まは其脱謬を審詳勘へ

宣奉行の署名を記せむ其文案かといへり公式令より詔書云御書日者留中務省

行の義は下公式令小云一文案は上条神祇官為業別寫一通即署送大政官とあり宣奉

受給より此省より其事を奏聞大徳のころ云々其實勅を知り施行受事覆奏は詔勅の事也

奏聞の如し始の奉勅の人の此省より申送るは既く奏を經へ然る小此省より

奸謀を防ぐためあり及覆の奏は再度の奏と云かくをば詳し其實勅を以て

是を覆奏といへり是を覆奏といへり事は廣くいふ詔あり公式令註し凡詔書者内記御

所作詔即給中務省式受勅人宣送中務省中務覆奏と見え此奏

訖の後常式より依り署名を取らる註し公式令文を載るは委

下条宣は是勅旨を宣へ聞むるをいふ此侍従と云も廣く

註し侍従の宣命は御所の侍従の官人小勅命を宣る義あり此侍従と云も廣く

従八人を云小限軍防令不有所征討發日侍従充使宣勅慰勞と

あり此事より即ち征行の勞を慰勞為御使を給るをいふ勞問は慰勞又存問と云い

あり此事より即ち征行の勞を慰勞為御使を給るをいふ勞問は慰勞又存問と云い

あり此事より即ち征行の勞を慰勞為御使を給るをいふ勞問は慰勞又存問と云い

あり此事より即ち征行の勞を慰勞為御使を給るをいふ勞問は慰勞又存問と云い

と二事ありて持統紀に慰勞を根岐羅布とよみ軍防令註に慰安也と見ゆ
慰は其苦勞を謝して人の心を安むる義ありて唐百官志
中書省の条に慰勞制書は廢勉贊勞也といふを考之し戸令に問百年註に
問其安否といふは存問あり
註に二事を辨て軍防令に凱旋之日奏遣

使郊勞公式令五位已上致仕身有畿内令内舍人一巡問奏聞安否とあり
を證とせり唐六典通事令に余り軍出則受命勞遣既行則每月存問將
士之家視疾病凱旋則郊勞と勞と問は二事ありてあきらむるなり

此宣言勞問

を連ね記せるは宣言をもて勞問のよりあり中間に註あり故なり又侍從内舍人
の職之省の掌にありて管司の事は皆長官の物判の故に具に顯てき
は神祇長官の例に同一此事は神祇官
受納上表は百官の表疏と直奏
を以て此省に受取て卷するを其臣人
大政官は申送らたては公事の外
致仕の表の類

又官小由て後此省小由もありて職制律小稱律令不便於時云云
諸關上表者不坐如此之類經中務而先申大政官後經中務上表と
見ゆは此意見上表は儀制令に陛下上表所稱集解に謂進天
封事の文書あり

皇之書謂之上表と有り猶下儀制令云云一監修國史は圖書寮
にて國史を記し修め置く時此省官人の檢察をせしむ
押監は文字を
記するを檢察の
事にて俗に文字の
目附役と云か如

國史は當御代の起居注の類ありて國史とて史記漢
書のたぐひは
ありて夫今の日記記また編年記をいふて此省押監は文字を忌諱
起居は御所の行事を日記記注を義ありて此省押監は文字を忌諱
の言あり故あり

註に雜令云災異の事を陰陽寮奏聞訖また季別
此省に封送と國史に注し入とある國史は此より證ふいへり
季別は
四季也

女王は二世より四世以上をいふ五世王は皇親の限ありぬ故なり
親
の女を二世女王といふ
五世は四世王の女ありて
註に其五世は皇親の外を命婦官人の
命婦は有位の婦官人は仕官の號あり此例に准ふは
例に准ふとあり
皇籍の絶る故あり五世男王の諸臣の例も同一かくて

本条に内親王の事見えざる故に此省
婦人考課の本

司 をもて有品或隸け无品は隸かぬ理をいへるは信かたき註あり 其
小有品内親王もまた此省考課を掌まは隸へき故ありと无品
も仕官ふべぬ限り隸かざるは道理然ありと一といへる理違ふあり 是て親王
内親王^別勅處令して叙品の制あり上日行事の考課あるべきありは考課は
司のため設けられしものより皇親 諸王以下は諸臣の如く考課ある制を
尊属は 諸臣の例に同かた 諸王以下は諸臣の如く考課ある制を
もて女王を以て載る内親王の事もなきは此故あり 官位令小親王を
臣を位といふ差 考課令小嬪以上及内親王家事隸官内省此省定等
第送中務と見ゆし夫人以下嬪以上また内親王の家なる婦女考課文も此省
あり九等の次第を記注して中務省に送るを云り内親王の考課文も此省
を明くむべし 家事と其家仕女の事にて 女王は諸王の例に同一すも
のみも職司ありは 集解小女王為官者不限有位无位皆是為考擢也
行事功過を考す 考擢小女王皆為考叙也有位名帳故也といへり
と見ゆ或説不限有位无位女王皆為考叙也有位名帳故也といへり
申送る故あり此省に女王 考文は名帳ありは為官者の上日行事を本司より
の名帳ありは下条云へし 内外命婦は仕官の婦を内々 諸臣の婦を外と

いふ皆五位以上を帯たる婦人あり 宮内と宮外の 註小いへるも此義ありて命婦
は有位の婦とぞんか如し 命は後周の令に品階を改めし命より九命あり一位より
九位あるかありは周礼の制より 命は位と云 小同唐代も其名の
殘れりあり 猶下後宮職員 小云へし 此註五位以上妻日外命
婦と打まわしては違ふ 是此事も後宮の 官人は後宮職員令官人註婦人仕官者之物號
也と見え諸王臣の婦女有位无位の仕官 考課ある限を此条にいへるあり
仕官者も考課なきは 註十二司また氏女御巫繼女乳母東宮官人嬪以上女
此条に入らば 十二女司は後宮職員 小あり氏女は采女の類
暨歌女等といへるも考擢預り限りを云へ 御巫は女巫なる事神祇官の条云云
乳母は後宮職員令云九親王及子皆給 己繼女は下縫部司歌女は雅樂寮云云
乳母其考叙者並准官人自外女暨不在考叙之限とあり 此女暨は親王
官の女孺と云 是て此中務省は婦人の考課位記を惣掌は其考文は皆此
省に送る 名帳は婦人仕官の歴名帳また女王の名帳あり 後宮女
官人親王家仕女考課不考 集解小官人仕官不限有位无位皆是司有名帳
課の仕女も皆名帳あり

是司中務
とあり省せし

考録考撰て叙位考録考課令縫殿寮

註下内侍以下十二司之考課即本司録上旨行事送於此寮寮定考第申中務省其縫女本司校定直送中務とありて十二司は縫殿寮の考文を記送す制

をいへり采女は采女司縫女は東宮は後宮職負令の註云東宮官人考課者春

官大夫堂之見ゆ又嬪以上内親王家事は宮内省より送る事上りいへり親王の仕女は其本主女王正親司歌女は雅樂寮清巫七神祇

官みふ本司女官は此省文官を武部武官は兵部の考課を定め位級を授け

と云く多む其上第官人の叙考制あり考課の二令あり位記は婦人給位記あり

男官位記下公式令云へり諸國戸籍は國別民戸籍帳あり戸令あり

民部省の掌事此省の事御覽に備へんと兼て此省にありて

は毎年民部省より送る事臨時主上顧問の日省卿其對小先任は

務式小凡京職及諸國所進戸籍皆令染榮國不在此限也若有未進

者移送民部省あり移は諸司相送文牒あり古は出書をせし人として

黄蘗を以て文書を染むる事圖書寮より云へり

租調帳は諸國の租稅調庸計會の帳あり唐制は有田則有租有戸則在

此帳を送る其義戸籍に同此省は侍從獻替を掌事及諸國戸口増減

租調の多少を以て規諫獻替を申す料ときこの豊年は常法凶年は減膳

あり註倉庫令載調庸の物諸國より京師に送るべきは皆其物

見在の員數色目を各一通づ簿帳を造り送る其簿は民部省に納む是

を省を租調帳といふ別一通を造り民部省の中務に納むる故に此省に租

調帳あり又其戸籍租調の諸籍を此省執用ひ檢校の職ありを唯

御覽の用意のみなりと此二簿の中務にありてを曉たり民部は戸租調檢校

其簿ありは同職に混せんと思ふことありかり例令條り職ありを此省に

多く見ゆ擬御覽の擬は字書を揣良以待也とあり用意と云ゆ僧尼名籍は

治部省の職なり其義上と同かへり雜令に僧尼京國官司司每六年造籍三

通各顯出家年月及夏腊德業一通留職國以外由送大政官一通送中務

一通送治部と見ゆは京中諸國の僧尼名帳あり此令例に上りて戸籍租調

帳も民部省から送諸國より

集解よりと倉庫
口令の簿と大政官
小送下民部省に
送ると云は送す
官受し民部中務の
付んかたよりさの
義解は送す

大政官を送る官より省に附ると云々集解戸籍以下之簿非此省之職掌

れと註り倉庫金を證とせばはさてある正五上從諸國申送大政官官即送置中務省爲經御覽也故更寫一通送置身

いへり大輔一人の輔は副職なり周禮春官大宰条に置大小二員を置れ

たり掌同卿は卿元日は侍従よりをいふ其輔といへり此義よりか

之人註に近侍者少納言侍從中務判官以上也判官も次官より代て近侍を

小凡親王及大納言以上並中務女輔五衛佐以上並給隨身符と見え其任の

重きホと七省の次官と異あり官位令り此省判官以上七省より

不献替は省卿は侍從献替されと次官の故に献替せし唯規諫のみをいへり

自餘同しかり規諫は常典の違失礼節の忘誤を諫め教へ奉り正しく

おはせしむ規は規則諫は諫言なり周禮司諫の註に諫猶正也以道正人行

唐六典門下省条に諫議大夫掌侍從贊相規諫諷諭凡諫有五其三曰規

諫謂陳其規而正其事と見え此大少輔は其職を兼たり規は其任の

漏洩替違失忘誤の事とて規は其任の重く大なるを規諫は其事小な

るの差別を立たり註り忠義の志をもて人主の過失を正匡しく教へ奉る

を規諫といふは然る毛詩大雅小雅職有闕仲山甫補之公式令り凡在

事陳意見註志在忠正披陳国家利害者也と見の此国家利害は大事

規諫は尋常の事とて規は小事をいへり長官次官に大小の制

を立は其義同かり大小は朝廷政務の事に拘るるは大若無

卿者得献替の理は事なる事なる故に唯字を附し唯字を附し

卿元日は大納言四員あり唯字を附し後官職員令り尚侍掌奏請宣

大少輔は制を犯かた唯字を附し傳典侍掌同尚侍唯不得奏請宣

傳とある制子同公式令り詔書式云中務卿不在則正六下大丞一人は判官の

職なり詔書に丞佐也と見の唐六典尚書省に左丞右丞

あり女官考文を勸問の義あり官人は婦女の社官號勸問は一年上日行事の

功過の實を糾脱漏違失を問ふ俗不取調考文を送り官司を省り集

め問は式部兵部二丞の制も同出向於省被問於事不便未知是非といふは

集解子官人

大山の別掌注あり

違へり正七上考文を記注の
本司まで女官を召問に正七上考問と云へき故考課を記すは其考不節
はありへし
餘准神祇大祐と本註を加へたるは八省の始のあり故あり省の判
餘の判官小殊あり糾判省内審署上神祇大小有別堂者注无職掌者不
文案勿執旨失神祇大祐准知正七上副正七上注といへる別堂は官人考課を掌るのみを其餘判官の掌は同

大録一人正七上は省主典として記事官あり神祇大小餘判官准此と既く其例を載せたり
生は二十員なり元明紀和銅六年十二月庚子始加中務史生十員類聚國史
職官部小平城天皇大同三年戊申置中務省史生十員また清和天皇貞觀
十年二月廿六日壬寅省中務史生六員あり大同三年二十員を加へられしを
貞觀十年六員を減し三十四員
小定めあり十四員を減せられしは詳かきされし式部式の中務史生二十人と見ゆ

侍従八人堂常侍規諫拾遺補闕

謂拾遺忘補益
闕失即是小事與

大輔規諫同也

侍従は中務省を管せり正七上一司れば別条に記せり此条以下内礼司和名抄職
員令云侍従局中務侍従記せり御所近侍の職あり此八員の内三人は
少納言の兼たり上少納言本註其少納言在侍従員内と見ゆ其實は侍従
續紀宝龜元年正月宴次侍従以上於東院賜御被次侍従の號見ゆ此後
の外外なる事次は正七上文德實錄仁壽元年四月以從四位下道野王
等及諸臣二十餘人為次侍従正四位下高故王等及諸臣二十餘人為出居
侍従と其員を制められたり出居の號あり侍従は此時を始めありへきと云次は
むら俗の家端あり間を出居御所の次あり座位ときこゆを出居は端居の名目あり
式給時服条侍従八人次侍従九十二人また九伊勢大神宮祭主帶侍従及次侍
後者不得差他神和儀とあり出居侍従は後り得められか考へたり下野國
人蒲生秀實の誤り出居侍従中務式未詳雜式云聽其中十三人昇殿僅是而
已といへり

類聚國史 第三 小淳 和天皇 長九年八月己巳俱

非侍従以上綿有差と非侍従の號も見^{非藏人なるの非}此後下御代

の員を増加せられたりかとも此號は見^{後次侍従出居侍従非侍従の名なく打まか}

めかたり仁壽元年小正侍従八人次侍従二十餘人出居侍従二十餘人と五十員

は舊制にて次侍従を増給^了制度と見ゆ和名抄云親王以下五位

以上入侍従藉者百人といふ此項は親王侍従を兼給^了にやありし官職秘抄

置^了なり次侍従の名目は見^了後^了は侍従の員を多く置^了て天正年中^了

文官の外武臣も此職を給^了り正次の差別ありされと武臣は員外ありて此侍

従とも云^了中務式九次侍従員百人為限細書^了正侍従八人在此員中とあり

制を摸^了れ常侍は御所小常日社候の義あり^{今の近習役}規諫は上^了

云り拾遺は遺忘を拾^了ひ^了ぬ^了り^了取^了る^了を^了い^了て^了主上の違失を教^了へ^了覺^了し^了申^了に

をい^了ふ^了集解^了拾遺者行事有違失則申^了悟^了耳^了とあり拾^了は^了欽也^了綴也^了と書^了り

一唐六典小左拾遺右拾遺の官名ありて皇朝所置言^了補闕は漏洩^了稽緩

國家有遺事拾^了而論^了之故以名官と見ゆ此義^了規諫拾遺補闕も平日

の違闕と正法小補^了ひ^了導^了き^了奉^了る^了を^了い^了ふ^了御側^了に^了居^了て^了侍^了奉^了る^了を^了云^了て^了集解^了小假令御酒

過度規諫耳補闕者臣子欲朝見出御之時見^了御鞞^了不着^了則奉服耳皆常侍

計行人滿三千以上兵馬發日侍従充使とあり將軍を慰勞給^了ふ小近

侍の者を使^了け^了寵恩を示^了給^了別勅あり^了此条^了侍従の雜^了註與大

輔規諫同也と^了中務大輔の職^了規諫^了と^了あり^了此拾遺補闕も同義ありと

其字の異なる故い^了へ^了る^了近臣の職は^了い^了へ^了る^了かの差別

内舎人九十人帶^了刀宿衛^了供^了奉^了雜使^了若^了駕行^了分^了衛^了前

後

内舎人も侍従と同^了く^了一司あり^了考課令^了侍従^了また^了和名抄^了官名^了小侍^了後局

内舎人局^了俗謂^了局如^了所侍^了後^了見^了局の義^了は大政^了御所^了内の^了舎人^了職^了よ^了て^了

所内舎人所是也^了官の条^了云^了り^了十

近臣之役也といふか如^了六典門下省小左補闕二人皇朝所置言^了國家有過

之蓋取^了此義也魏志^了云文帝勅侍臣曰公卿等宜^了軍防^了令^了有所^了征討

拾遺之遺^了補^了朕^了之^了缺^了也^了此条^了の^了拾^了遺^了補^了闕^了も^了此^了義^了あり^了軍防^了令^了有所^了征討

計行人滿三千以上兵馬發日侍従充使とあり將軍を慰勞給^了ふ小近

侍の者を使^了け^了寵恩を示^了給^了別勅あり^了此条^了侍従の雜^了註與大

輔規諫同也と^了中務大輔の職^了規諫^了と^了あり^了此拾遺補闕も同義ありと

其字の異なる故い^了へ^了る^了近臣の職は^了い^了へ^了る^了かの差別

中其曹同ありて日夜宿衛せり漢書注小舎人親近左右之通稱後以為
舎次は連舎の巡番なるべし其舎次宿の義あり宿衛也宿衛為舎次と
舎人の官號あり唐に見え中書舎人起居舎人通舎人の名あり舎人の
義は同皆豪家の年少を拜せらる事あり一三代實録貞觀十年
原朝臣良繩傳諸内舎人軍防令凡五位以上子孫年廿一以上見
皆是豪家之年少也と見えたり
無役任者毎年京國官司勘檢知實限十二月朔日並身送式部申大
政官檢簡性識聰敏儀容可取充内舎人三位已上子不有簡限と
取充の制を記せり三位已上の子は檢簡を直り取充の制あり一此初置は未詳仁徳紀十
成寅朔以官人玖賀媛示近習舎人等また三十年天皇遣舎人
鳥山云云允恭紀七年小舎人中臣烏賊津使主と見え近侍の舎人
と見え孝徳天皇御代以前は詳あり文武紀大宝元年六月癸卯始補内舎
人九十人於大政官列見九十人を置初始あり令条も九十
類聚國史職官小大同三年正月壬寅詔減内舎人定四十員日本後紀
見ゆ此時五十中務式給時服条小内舎人四十人見ゆ又云凡大儀云内
員を減せたり

舎人不足者權補四十人とあり大同三年の格いと多々減少せり故ありむ
常例九十員は其員多々費耗を省て後省せられ凡大儀の日其員たらず
權宜の令を補せり官職秘抄久安四年正月有勅定員六十人とありむ
此故也之内舎人兼職の事と類聚國史職官小大同二年五月庚寅停闡
司奏事令内舎人奏之其儀一如闡司とあり闡司の職は後弘仁二年九月
庚戌停内舎人奏依舊令闡司奏之と見ゆ此内舎人は御所の宿衛官を
月壬寅詔令與監物主計共出納雜物而辨官中務民部並不預焉四月以
内舎人二十人准監物給馬料以知出納也とあり闡司の代りまた出納の事を知を
もて尋といへ闡司の舊制に復りしより此出納も罷められつる此後は見之
あり或説り内舎人准監物弘仁三年四月といへり尋ぬ中務式九内舎人歴十箇年
始載勞帳但雖歷十箇年上日不滿二千四百者不得載之考叙の制と記せり
十箇年は令條にいへは一年二百四十日の上日准ふは二百四十日
二年四百日六年壹箇月餘當ふ續日本後紀承和二年正月己巳内監内舎人と
あり内監の義は大舎人寮小委と云り帶刀は帶劔して宿衛官人は聽て御所小帶劔也

制をいへり官衛令也

彈正式小九刀子及五寸以上不得輒帶但衛府小

聽之と衛府の官人のみ聽されり東宮坊少帶刀舎人

宿衛は御所小直宿

して日夜衛護の職をいふ考課令小最條勤於宿衛進退合礼為内舎人之最

御所御所故御所供奉の日御所官衛令宿衛の註謂宿衛者兵衛及内舎人也とあり

雜使も中務省の勅詔を奉て處々の使御所差遣は御所例御所其色は定御所故御所雜使

といふあり軍防令小大將出征云々其家在京者毎月一遣内舎人存問御所其防人滿一

千以上發日遣内舎人發遣公式令小九諸五位以上諸臣三位以上致仕身在畿内每季

五位以上每半年並令内舎人巡問奏聞安否とあり聖武紀靈龜元年十月辛未遣内舎人於近

紀天平勝宝八年二月庚戌遣内舎人於江國慰勞持節大使藤原朝臣宇合孝謙

六寺誦經襪有差と見ゆ襪を布施の物ありか、雜使をいふ元正紀養老三年十月賜一品内舎人親王内舎人二人二品新田部親王

以供左右雜使といへり供奉は御所にて倍後をいふ儀制令小九文武官三位以上假使

者去皆奉辭還皆奉見其五位以上奉勅差使者辭見亦如之見て群臣辭見の日また元日

節日朝見の儀に倍後をいふ守護の官小駕行分衛前後車駕行幸の時小其前後

小分列り衛護をいふ云り左兵衛右兵衛府の官人も前後より分衛の字あり

小近く供奉府官は其外を圍ふ守護猶其条に云へり

^{正六上}大内記二人掌下造詔勅凡御所記錄事中内記二人

掌同大内記少内記二人掌同中内記

内記も此省の別司あり此省は中大監物条註小凡此省錄以上為同司内

記監物主鈐典鑰各為一司といへり考課令最条より内記さて内記は外

記對したる名あり内記は御所あり記事の官外記は大政官の類聚國史第一

百七職官部小平城天皇大同元年七月壬子罷中内記定置史生四員同四年

三月己未減内記史生二員と見ゆ式部式より内記史生二人とあり造詔勅

も詔書勅書を造るといふ大外記の条より勅造詔奏とあり此条に造と有て勅

類聚國史以下内記の条に云へり

詔勅の書は式様あれど勅造と云へ唐六典中書省の中書舍人条下凡詔旨詔
勅及玺書冊命皆按典故起草進画既下則署而行之とある典故も式様あり
されど定公式令の詔書勅旨の式あり註詔書勅書同是綸言但臨時大事為
詔尋常小事為勅也また凡詔書者内記於御所作訖即給中務卿此は勅旨
を授て作

内記式臨時詔勅者承旨即内記作詔書畢納管令參議已上若内
進於御所

侍進於御所凡節會及尋常詔旨者内記預書元日賜群臣宴及七日叙位賜宴
十六日踏哥九月九日賜宴十一月

大嘗会等詔旨當日進參議以上証月計四日齋會四月成撰位記同月

任郡司等詔書内記前一日付内侍執奏了即時返授内記内記當日早

且進大臣其詞と見ゆ常例を預書といふは後の制にて
臨時尋常及び勅旨に依るべし詔勅の書は勅旨
各見儀式

小違をぬを専ら要と考課令最不明於記事不失勅旨為内記之最と云

凡御所記録は御所凡記録の義めて禁中の記事抄録はをて掌事あり

宣命位記の類多かるべし内記式凡元日朝賀依有滞故御所を主上の
延用三月者其宣命之辞猶稱朔日と記事の式を載たり

また宮殿をいふ天武紀は御所を於毛止とあり
今も禁内を御所といふ是あり事字は令條の例長官
職掌の下に記せり流布本了事字脱落
たり今任例に依て補へり中内記少内記を副

職あり或説小此大中少の内記は長官次官判官小當りべしと云は誤なり大は神
祇官に准ふ小大は伯中少は大少副と云へ判官の大中少も同一司と
必を判官主典
を備ふるは大同元年の格小中内記を罷らむなり
全之は
上小云り

大監物二人掌監察出納請進管鑰謂管鑰猶鑰與
鍵此為管不同

是即庫藏管鑰其諸門管鑰者聞司掌之也案宮衛

令及衛禁律衛府各請進管鑰即亦聞司掌也凡此

省錄以上為同司内記監物主鈴典鑰各為一司即

三等以上親不可相避其侍從内舍人亦不相避之

中監物四人掌同大監物少監物四人掌同中監物

史生四人

監物中務省の一司あり和名抄に監物局職員令云中務省監物と有て訓
あり持統紀七年四月小監物巨勢邑治云々ある監物を於口是毛乃々豆加佐
とあり此訓よりしてさて此官名は大正令以前小定まらざるときこの文武紀
大宝元年二月丁未始任下物職とあり下物は監物と同訓ありしかば
始め云つるは後小監物の二字に改められしかば猶考ふべし官名は府庫の雜物出納を
監察の義あり

其色目員數を監視し檢察せし高野紀天平神護元年十月壬子先是
兵庫器仗者中務監物與本司相對出納至是諸司相知出納と見えて
兵庫は兵庫古は監物と本司共る庫物を出納せしむ此時諸司も相知共る
出納の例始まらざる大正養老の古制に監物のみありけむ持統紀七年四月辛
巳詔内藏寮允大

伴男入坐職降位二階解見任官典鑑置始多與野大伴亦坐職降位
一階解見任官監物巨勢邑治雜物不入於已知情令盜之故降位二階解見
任官とあり監物本司内藏寮允大典鑑の三員日本後紀大同三年正月庚
戌始令内舍人與監物主計共出納諸司雜物其辨官中務民部等並不預

焉諸司相知て對合の事せ侍められたり此後また舊制を復せしむ大政官

式小凡應出納官物者本司當日申辨官辨官及中務監物民部主計等與

本司共檢出納其大藏絹綿絲布等物五位以上臨檢案記同署自餘
雜物及餘司物者史並主典以上出納

本司は勅を奉て藏庫の官物を出納せし
庫藏の寮司あり案記は出納の物を委
しく年月員數

まて記を文抄をまてて庫藏開閉雜物を出納の日監物は必を檢察の職あり

請進管鑰は庫藏開閉の日其管鑰を聞司に請申し主鑰を開閉の

事訖れば復進むるをいふ其狀の委しく見えたるは大政官式に應出納大云本
司錄申日雜物出納申辨判命之錄稱唯主鑰申云給鑰止申監物命

日給之即稱唯受鑰諸司共赴立正藏前主鑰引藏部等申日開藏申

監物命日開之即稱唯令藏部開諸司檢拔出納了即監物加封主鑰申

日事畢諸司即退と記せり鑰をもて開くは主鑰藏庫を開き出納を主藏部

を計ふは官人の奸偽を防ぐは公事にて本司の命を受けて官物の員數を記録し辨官に申す

様あり 辨官の奉勅も、員數を記し其本司へ申送り、八省皆同此は移
の書ふ、古へも然るありけし又近侍の臣口勅を受けて御所より勅書なき例は
同式、凡奉口勅出大藏省物者本司奉勅經中務省省輔一人監物一人本
司輔已上一人相共出之、三司共入奉進錄物數三司同署便附本司申送辨官
其出銀錢等物者省錄以上一人監物一人與本司錄以上二人共出奉進申送
於官亦同上例あり 奉口勅は少内言侍等の類なり其職を考へ、本司經中務は
覆奏より本司輔已上大藏省を、口勅は中務省を、賞賜の物をいへり
註る管鑰は鑰と鍵との如し此を管といへり同物ありは、此は鑰の雌雄を
鑰と雄と云へり 猶管鑰の事
は官衛令云、かくて此は庫藏の具を以諸門の管鑰、關司に在て衛府の請進あり其
證は官衛令衛禁律も衛府各請進管鑰あり是も關司の掌より監物は請進せし
其職異あり故あり按り官衛令云凡奉勅及開諸門云衛府覆奏開之註、衛府轉告
關司衛禁律進門鑰違遲註、衛府及關司之故也といへりまた集解小門鑰者
衛府請進也其出納者關司可掌不可由典鑰也といへり考へ知へり 關司の女官
管鑰掌事

は後官職員、
令に見たり 凡て此省の太少錄以上を同司官人とし、主典以上
の故あり 内記監物主鈴典鑰
等は此省条中の載りても各別は昔司ありて司の制を以て選叙令同司主典
以上不得用三等以上親と制を立たれり別司ありは嫌避へきにあらず、此省と
異ありしを明らかにしたるものなり、かくては同司の疑ひある故あり下条の民部省
の巡察みふ此例にて あり主核主計刑部省の大判事解部彈正正臺
別司ありを知るべし 猶其条より云へり 正七下 中監物少監物は類聚國史 第一百
部小平城天皇大同三年八月癸酉加中監物二員 一本は大同四年二月
加中監物一員とあり
弘仁四年十月甲辰公卿言據檢職員令少約言三員中監物四員少監物四
員而大同年中量事繁劇令員雖損更加中監物二員古今異宜增減隨
時伏望省減加一依令条許之とあり此時二員を減せられたるなり也
中務式 給時
服条 大監物二人中監物四人少監物四人令員のまじりて
り後には中監物を罷りたり、私名抄
中務監物有大小と見えて中務有 史生は四員ありしを中務式 給時服条
の条 監
物史生四人式部式、監物史生八人とあり類聚國史職官部、大同三年八月癸
酉廢監物主典とあり其置始の年月

詳かあるは今按ず令余の主典の職見たる主典ふくて史生を置けりもいふけり
此司下置れり此令騰字の時服落たるものありむかざらば大同の格を廢す
もあはれよく考ふに官職秘抄に監物
主典有大小未詳何代といふ主典の傳あり

正七下
大主鈴二人掌出納鈴印傳符飛驒函鈴

正八上
少主鈴二人掌同大主鈴

主鈴は鈴印また飛驒の鈴を専ら主當の故りやめて職名を負ふかむして歴
代増減の制ありか中務式給時服の条小大主鈴二人小主鈴二人見ゆ 鈴は
驛路の鈴より孝德紀大化二年正月甲子朔宣政新の詔に置驛馬傳馬及造鈴契と
始制あり契は傳符 天武紀に天皇思欲返召男依等即遣大分君惠尺等于
留守司高坂王而令乞驛鈴また將軍吹負難波小郡而仰以西諸国司等令
進官鑰驛鈴傳符と見ゆ 難波以西の諸国に給るれ
鈴契を來て進免せむる 印は内印外印を中務

主鈴式凡下諸國公文少納言奏請印狀訖主鈴印を以て見えて踏印は此司の執行
ありし上文少納言の職に監官註し唯得監視踏印
傳符は傳馬符尅ふ

飛驒函鈴を飛驒に用ふる函と鈴あり 上りしは尋常の驛鈴を成
り猶公式令 文武紀慶雲二年四月辛未給大宰府飛驒鈴八口長門國鈴二口と

見ゆ 飛驒鈴と鈴と二 函は封管あり 古に書管を函と云は天武紀に唐使を云
り中務内記式凡在外官飛驒者大臣奏畢云少納言中務輔内記主鈴等

請印封函造 在外司司其國凡封驛傳符式少納言中務輔主鈴等
請印准飛驒式内記主鈴封函官吏造 文函を封する日此官人立會の制と

造は官より造りて此式を勅符式飛 凡飛驒並驛傳函及遣勅海
驛式をいへ公式令を飛驒式見えて勅符を具する 文函を官牒はみふ
國勅書太政官牒者主鈴封之 主鈴の封を制を立る

正七下
大典鑰二人掌出納管鑰少典鑰二人掌同大典鑰

省掌二人掌通傳訴人檢校使部守當省廳事鋪設

餘省掌准之使部七十人直丁十人

典鑰は持統紀に典鑰を加伊止利す。加岐乃豆加佐と訓り加伊止利は加岐
鎰は鑰カキと大管鑰を執持て庫藏を開閉の職あり是も一司あり事
上 監物の条云へり持統紀七年四月辛巳詔云典鑰置始多々久い人見

中務式給時大典鑰二人少典鑰二人あり古より減加の 出納管鑰
は庫藏雜物出納の管鑰あり管鑰は俗にいふ志夜宇加岐あり礼記月
管鑰鎖之入内者也鎖須閉者鎖箇也及鑰鎖匙也 上 監物の条註小管鑰
管は志夜宇の牝雄鑰は加岐ふて雄といふものぞ

猶鑰與鍵牝為管不同と見ゆ在京庫藏の管鑰あり典鑰式凡諸司
藏庫鑰匙毎日與監物共毎日請又進圖書寮民部省大藏省掃部寮

官位今下從六位下大
藏大主鑰 正七位上
大典鑰と相當異
ふは其庫の重
輕よりなる中務
の主鑰の故あり有
へ又諸司の庫
を開閉は大藏
内藏より下れり
あり

大膳職主殿寮大炊寮鑰也兵庫鑰臨時請進と八司の事を記せり此中
藏二司の事と見えぬも各主鑰あり故あり兵庫は尋常開閉の限あり
在曝涼の時のみふれり臨時といへる其餘は且夕出納の事あり中務監物式
凡請諸司管鑰者毎日監物並典鑰等共候延政門外近衛開門大舍
人就闈司叩門二声闈司問日誰大舍人林姓名日鑰給良年止監物姓名典
鑰姓名候門止申云云監物奏日司乃賜物下年鑰給登申勅日取之
共林唯退出典鑰更引大舍人等進就鑰櫃下出管鑰授大舍人退出
轉授監物夕時進鑰之儀亦如諸司の庫藏管鑰は門鑰と同一く闈司
之と見ゆ近衛は近衛府あり

内藏大藏も主鑰と監物監察の事と同例あり此儀監物の条に
集解古記曰管鑰謂宮門及百官諸國倉庫等鑰也と
いへり按宮門は衛府の請申をせし宮衛令に記せば監物の檢察請進の限
ありと云ふと主鑰をいへば典鑰の兼職ありと云ふ本条を見れば詳し
るに諸國倉庫も其國司の掌れば在京の典鑰のありしを以て京國管鑰
の物掌はははと闈司ありと考ふる中務式に凡諸國所進不動穀鑰者
官副國解下少省即勘收庫若應出下者待官符下然後出充と見え
て其鑰を中務自有あり不動は貯置て出舉せぬ林ありと云ふ開閉せぬ制と
右の式文に見え三代實錄貞觀八年十二月八日己卯禁五畿内非有裁許
輒開用不動穀者不勤慎罪在違勅と見ゆ此鑰ふむとおると不動穀を
令後不起れば此此管鑰の具は典鑰式凡鑰袋皆以半革縫造若有損
考は用ひて

破者由省請換す凡納御鑰辛櫃匙納典鑰局監物式小年料所請
破者由省請換す凡納御鑰辛櫃匙納典鑰局監物式小年料所請

廢帝紀天平宝字七年
三月丁卯令天下諸國
進不動倉鈞匙以
國司友管因多
煩也より猶國守の
条云へり

馬蓑十領 蘭笠十枚 並宮人料 登美蓑八領 裏料あり 此馬蓑蘭笠は出納の雜物
運送の雨具より掃部式小凡主 鈴典 鑰等料 以古弊 疊六枚 毎年終充
之とあるは 駄馬の用途なるを 登美蓑は 嘉名を取らざるを 蘭笠を造るをいふ
皆雨具 省掌は上 大政官 小 かつ官掌 小 同職なるを 復て其職を
ときり

委と記せざるは 八省の始あり 故あり 令条は皆比例あり 神祇官大祐小判官の職
の制は貫通をし 中務大丞 小 准神祇大祐 小 畫工司 小 大政官官掌 比
正判事准比と稱し 小記せざるは 八省諸司の始めを 制を立たり 和名抄り官掌令案亦隨
守備官府此省は 守當省府のみ 官省の差別あり 司有必官掌省掌臺掌
之類是也 類聚國史 第一百七 職官部 小 平城天皇大同元年十月壬申 中務治部民

部刑部大藏官内等六省省掌准式部兵部二省聽把笏 日本後紀 式部
式小凡内外諸司官 凡 省掌臺掌 職掌坊掌 察掌司掌 使掌各二人
但省掌臺掌職掌並待本司移補之 自餘者判補之 凡 史生官掌

省掌云 以雜色人補之 並把笏といへり 此後 小 省掌の副職を置きた
は類聚國史 職官部 小 貞觀十二年六月廿八日己酉 置中務省扶省掌二人

扶は扶佐の義あり 式部式 小 中務扶省掌二人と見ゆ 又云 凡 省掌正員之外 扶省掌以入
色者各置三人 令習儀式 皆侍本司所送名簿 乃補之 若正員有關者 扶
省掌補之 治部民部兵部大藏 といへり 雜色の人入色より判補あり 其省
の儀式を熟習せしめて 正員の闕り 替らむる制あり 此補任は式部省の判事
官の始 神祇官 餘省省掌准之は上 大史系 小餘主典准比とあり 例同し 七省の省掌

も 比中務省省掌准之 知るべきを 是も八省の始を 使部七十人 式部式
小三十人 載くは 後減せらるる かくて 比省大少録 侍從内舍人内記
て省掌を記されしは 中務省院内 小 比六司の局あり 志下せし制あり 大政
官 小 三局あり 自餘省省掌も同かり 自餘は民部主計主税
例同し 彈正 巡察あり 類あり

中宮職 謂皇后宮 其大皇太后

皇太后宮 亦自中宮也

〇六

大夫一人掌吐納啓令 謂納啓於上吐令於下也 事亮一人大進

一人少進二人大属一人少属二人舍人四百人 分謂

番宿直等事

一准大舍人 使部三十人直丁三人

漢書皇后紀中宮 皇太后皇太后的宮をいひ、中宮は皇后の宮をいひ、皇后所居也と注あり
主上の御母を皇太后と稱し、御祖母を太皇太后と稱す。是は皆皇后の稱あり、故に中宮と申せり。或は譲り、天倉之居曰太宮、皇太子之居曰東宮、其中間を中宮と申す。是は漢に於ては、皇太后は太宮、院内を中宮と申す。然らば、尊號を申すに、職員令に、後宮唐の制、掖庭、中宮と申す。是は此義也。聖武紀、天平七年正月戊午朔、天皇御中制を以て中宮と稱す。後宮東宮と亦同し。

かくては中宮も皇太夫人の宮號にて専ら皇后宮とも定めかたし、是よりして猶考ふ

小大宝養老令の時、は文武天皇の夫人一柱のみ、其坐所を中宮と稱せり。

元明元正の二御代、皇后の聖武天皇の藤原氏を皇太后と立給へり。其坐所を事なれり。此柱のみあり。

皇后宮と稱し、皇太夫人宮號、小別給へり。是は聖武孝謙の御代、猶其坐所を

中宮と稱し、皇太夫人中宮皇后類聚国史第一七七 職官部 小聖武天皇天平二

年四月辛未始置皇太后宮職、施藥院に見ゆ。聖武天皇皇后は藤原氏にて孝

為皇太后、孝謙即位、為皇太后、廢帝、孝謙紀、天平宝字四年六月乙丑皇太后崩の

とあれり。立后の時、皇太后宮號なり。皇太后宮職あり。皇太后宮

を置たまへり。事かくて、此處、皇太后宮職あり。是は、藤原氏にて、孝謙天皇の再御位、

俗に稱徳天皇と申せり。孝謙稱徳の尊號を以て、此後、天平宝字二年八月甲子

官制、改中臺、曰坤官宮と見えて、中宮の號は罷れ、坤官宮も同八年九月丙

辰の詔、て、停められり。皇太后藤原氏の崩後、皇太后大光仁紀、天應元年五月

皇太后もまゝ、是は、やめられり。此は、

乙亥始置中宮職とあり 類聚国比始字疑はし 後置と云ふ 聖武御代小皇大

夫人御在所中宮と稱し 別々皇后宮を置て久く其號絶へし 始字を用ひ

あむ **此御代中宮皇后宮を並置すも新制あり** 桓武紀小延曆三年十一月

戊子天皇移幸長岡宮甲寅先皇皇后逢母氏憂不從車駕中宮復留在平城

云同八年十二月庚寅勅頒者中宮不豫云云 乙未皇太后崩と見えて中宮は皇

太后の宮あり 皇太后光仁純宝元年十一月甲子詔小井上内親王定皇后

桓武紀延曆四年正月己未從五位下藤原朝臣縵磨為皇后宮大夫と見ゆ

二宮並置比皇太后は桓武天皇の御母高野氏に奉りて光仁天皇の夫人と云ふ

多し證あり **高野氏は皇太后の定の**

桓武御即位の初め皇太夫人の號を奉り中宮職を置し侍るあり

かくて中宮と申せぬは御實母ある故 **新制あり職原抄中宮者是即皇后也**

本朝並置二宮太無其謂然而光仁御宇被置此職以來代々並置といふも此制あり

りされと二宮並置かくて所生の御母を中宮と稱し例とありて清和天皇即位

の初め先づ中宮職を皇太后宮職と改め其母を尊て白皇太夫人の號を奉り

中宮と稱し **此時は淳和皇太后の尚存を故り其御母を中宮と定め前の中宮の號を**

内外曰云云改中宮職 **改め皇太后と申せり其制は三代實錄天安二年十一月廿五日壬午宣詔**

為皇太后宮職とあり **日本紀略小陽成天皇御母藤原太夫人宇多天皇御母藤**

原太夫人も中宮と稱す此例より **一条天皇の御代より御妃二人を並立て**

后二柱まゝへきり何れも一柱を中宮と稱さる上之りい御實母のよし

小あは古の制より醍醐村上天皇より以來は皇后宮を尊れに中宮と白皇

を稱せる小此一条天皇の御代より二宮を置たり **是より大皇太后宮白皇后宮**

職原抄も本朝並置二宮太無其謂と云ふ此事も **中宮は皇后宮小異ふ或明ら**

皇太后宮中宮各其職司を並置す制と云ふ **中宮は古の制をいふあり職原抄**

も四宮並置 **大夫は和名抄長官の職曰大夫と云ふ又云四位五位已上**

為大夫位階と見ゆ **官位令より從四位下階 桓武紀天應元年五月乙亥以參**

議大伴宿祢伯耆為兼中宮大夫と云ふ **古より兼職の例より尋ねて官職秘**

何代も置たり **吐納啓令も諸臣の白皇后を申を啓と云其餘を令といふ**

天皇小奏勅と云ふ如し **啓は奏令は勅の義より同吐納は吐出し受納をいふ**

上大政官の小註云納下言於上宣上言於下也と云ふ同 **宣は吐喉舌の職なり**

事字流布本不脱今補先へて長官各下は事字あり例 亮は次官

あり亮と諒同取執言中宮式 正月二日早朝 群官朝儀小賜祿親王以下云亮唱四位五位

名賜之參議以上令女藏人賜之若亮有關臨時權任官職秘抄

あり此權任の義進字は取登 中宮式小凡六月晦

日昏時神祇官率ト部等候西廊殿南職亮若進一人立東磧下對内侍

密啓曰御麻と見ゆ磧は磧小同職は中宮職あり官職秘抄少進五位多在

大小属和名抄佐官云職曰属官云職曰属官云云云職曰属官云云

奉宿衛の職おて分番上下専ら大舎人の職准ふ

十人式部式補諸宮舎人者中宮入色一百五十人外位一百人白丁一百

五十人と見ゆ入色外位白丁をて四百人よて令各の員小あり

員を式部式中官職使部廿人とりて令後制此職小職掌を置れは

集解格文を載て弘仁九年三月二十八日官符云應置職掌二人並令把笏

右得皇后宮職解偶職務繁劇人物難整望請准春宮坊置件職掌

者云云とり式部式云史生を置す始は詳かふれと中務式給時小

中宮職史生四人式部式中官職史生八人とあり

左大舎人寮 右大舎人准此

頭一人掌左大舎人名帳分番宿直謂大舎人は供

定其宿直官人宿直者自依神祇官之例假使容儀事助一人大允一人

少允一人大属一人少属一人大舎人八百人使部

二十人直丁二人

左右大舍人は宮禁の宿衛官あり舍人は止祿利と訓り朝参の姓名を唱へ申す
義ふるし祿は奈閑の約り上内舍人小云し内舍人は宮禁内の宿衛此舍
人は宮外内内の辺りの守護

ら大舍人式は元正月元正者六位以下官四人史筆二人將舍人一百三十六人左右分
頭各執威儀物入自東西廊門陳列大極前庭云右陣亦如之前庭の衛

護をみよし尋常は御所外を元正紀和銅三年十月甲子依品
定祿法勅番上大舍人帶劔舍人見内舍人帶刀元明紀養光
三年六月丙子令左右大舍人寮別勅長上始把笏焉此後類聚國史職

部小大同三年八月庚戌併左右大舍人寮為一加少属一員とあり日本後紀
格同年七月比一司とあり寮は官舎の名あり寮は窓を即
十一日格といり寮は窓を右大舍人准比は左大舍人准比をいふ此

義を取て舍人名つけたる右大舍人准比は左大舍人

六字本文本註のいふ詳かふ諸説みふ本註といへり或説を本文といへり
伯職の下小餘長官判事准此の如し今按り本註の例は職掌の下に記すは神祇
左大舍人寮右大舍人寮と一字關後准此の二字をいふ

ら加つる本註を説くは左大舍人寮下り見之る左右の官職
皆同し頭一人は寮の長官なり大舍人名帳は元左寮下録る舍
人の姓名帳あり長官は寮内惣判の故に帳を掌るし分番宿直は名

帳をて毎日送番の舍人を官人率ひ宿衛番直をいふ其員を分て次第
上日て衛護ををいふ分番

寮内宿直官人は判官の定むる事神祇官大祐の例とあり大祐条
餘判官准比を下此長官の職を親ら寮頭は其官人の番
官禁の宿衛上番を知れ寮内も同なり疑あり故あり

直を知り制あり諸司長官み同例あり假使は休假雜使あり假は官人の假を
給ひ辞謝の日朝参をて官庭まで道を教をいふ大舍人は官庭の宿衛
ありは官中下参入の

給ひ辞謝の日朝参をて官庭まで道を教をいふ大舍人は官庭の宿衛
ありは官中下参入の

人を導き、大舍人式、凡諸司奏事者舍人四人詣閣門第一間、再唱聞司

云云とあり、も古儀の残りあり、上り止祈利は唱へ入る義、入る人姓名を唱ふといふも考ふべし、唐六典中書省の通

事舍人の職、小掌朝見引納及辞謝者於殿廷通奏、通奏はて官人の奏事辞

と官人朝見辞謝の事より参入の引奏、此職に似たり

見、内舍人は宮内不居て奏

見、内舍人は宮内不居て奏

見、内舍人は宮内不居て奏

見、内舍人は宮内不居て奏

見、内舍人は宮内不居て奏

見、内舍人は宮内不居て奏

見、内舍人は宮内不居て奏

見、内舍人は宮内不居て奏

見、内舍人は宮内不居て奏

見、内舍人は宮内不居て奏

見、内舍人は宮内不居て奏

見、内舍人は宮内不居て奏

見、内舍人は宮内不居て奏

見、内舍人は宮内不居て奏

見、内舍人は宮内不居て奏

見、内舍人は宮内不居て奏

見、内舍人は宮内不居て奏

見、内舍人は宮内不居て奏

見、内舍人は宮内不居て奏

見、内舍人は宮内不居て奏

見、内舍人は宮内不居て奏

見、内舍人は宮内不居て奏

見、内舍人は宮内不居て奏

見、内舍人は宮内不居て奏

見、内舍人は宮内不居て奏

見、内舍人は宮内不居て奏

御輿長、駕昇頭、
取鈴、着駄の前、
道、鈴を肩て、
行く、ふらふら

横羽八柄、八張、前八具、各有胡、蘇、大、八口、梓、四、竿、杖、二、枚、
如意、繩、拂、二、枚、甲、一、領、右、陣、亦、如、之、
年、正、月、辛、未、是、日、制、主、礼、六、人、元、以、大、舍、人、為、之、見、
容、儀、を、教、導、守、の、掌、あり、し、を、主、礼、司、を、定、め、れ、
供、奉、の、例、は、大、舍、人、式、小、凡、車、駕、行、幸、者、舍、人、四、番、
人、取、鈴、四、人、若、皇、后、有、幸、又、供、御、輿、長、と、見、
入、は、次、官、判、官、
左、右、寮、為、一、寮、の、日、一、員、を、加、や、見、
小、大、舍、人、少、属、二、人、と、い、へ、り、
の、職、を、寮、頭、の、職、
持、節、料、左、右、舍、人、至、赤、石、齋、明、紀、七、年、五、月、
大、舍、人、式、左、右、の、事、
凡、内、六、位、以、下、八、位、以、上、嫡、子、年、二、十、一、以、上、見、
責、状、簡、試、分、為、三、等、儀、容、端、正、
於、書、學、者、為、上、等、上、等、為、大、舍、人、

あり大舎人を取 天武紀三年五月乙酉朔詔公卿大夫及諸臣連並伴造等曰
夫初出身者先令任大舎人然後選簡才能以充當職と見えて古く出身は
大舎人より始まる制あり下類聚國史職官部小延曆十四年六月己酉勅自
今以後左右大舎人以蔭子孫補之其位子者依令以容止端正工於書筆者
補之不得妄以雜色及畿外人補之下大同元年十二月癸亥勅左右大舎人
自今以後以蔭子孫補之以外一切停補簡試次容止端正工於書筆者
補之但非有別勅以外不得妄以雜色及畿外人補之下格条見之上は
蔭子位子の外下補任の事あり故上は 文武紀慶雲三年二月戊子山
六兒其初産三男有詔為大舎人元正紀和銅三年正月戊寅又員數を減
薩摩國貢舎人雑色より別勅あり上は 又員數を減
せらるも同國史第一小大同二年九月依令定左右大舎人員各八百人先是改
令半至此復旧改令半は各四百人小改の同三年八月小左右を併せ一寮とし舎
人四百員を置しときへて集解小弘仁十年八月廿六日官符云減定大舎人

數事元八百人今定四百人右被中納言藤原朝臣貞嗣宣奉勅今依舊置内
豎宣依行定其食及時服定壹佰人とまし三百員を減せられりかか減せら
所を齊置あり故上は 類聚國史職官部小大同二年十月廢内豎省以其人
隸于左右大舎人寮各百人と見えて此内豎上殿舎人といりときこ内上殿は
前庭の職あり殿上も許せりり名目あり集解弘仁元年正月制小上殿舎人
復旧名為内豎所とありと同十年八月格内豎を置れりは大舎人の員制も
減れりり内舎人も減せりり日本後紀大同三年正月壬寅詔小減内舎人
定四十員日本紀畧弘仁二年正月甲子制止百二十人復旧名為内豎とあり和
名抄官職の条内豎局今内豎三百人とあり員制を中務式給時
按ふり大舎人三百員を停められは内豎を定の置く故ありは 中務式給時
舎人一百人但大歌生十人在舎人内といり 使部二十員式部式小大舎
人寮使部十人とあり 同式下大舎人寮史生
四人あり後置れりも也

圖書寮

頭一人掌經籍圖書

謂五經六籍河圖洛書之類其諸史百家亦兼掌也 修撰

國史 謂摺據國事 內典佛像宮內禮佛 謂宮中諸作佛事也 正月

修緝史書也 金光明會及臨時轉讀般若 校寫裝演 謂截治曰裝 等之類其宮外者玄蕃掌 謂染色曰演即

寫書以下諸手 功程給紙筆墨事

助一人 正七下 大允一人 正七上 少允一人 正八上 大屬一人 正八下 少屬一人

寫書手二十人 掌校寫書史裝演手四人 掌裝演經

籍造紙手四人 掌造雜紙造筆手十人 掌造筆造墨

手四人 掌造墨事使部二十人 直丁二人 紙戶

圖書寮は和名抄不美乃豆加佐とありてとく文書の司あり 考課令最條

史者圖書助 圖書畫圖文書の義あり 晋書天文志東壁二星主文

以上也と云り 唐の類聚三代格小神龜五年九月六日格云於圖書寮

を取りしふん唐の秘書監下河内所藏内外典籍書法屏風障子並雜圖繪等者一物已上自今以後

不得輒借親王以下及庶人若不奏問私借者本司科違勅之罪

と載り此寮廢帝紀天平字二年九月甲子格小圖書寮掌持典籍供奉内裏故改内史局と云れ同八年九月丙申小復旧といり

經籍の經は學令小凡經周易尚書周禮儀禮記毛詩春秋左氏傳

各為一經とあり 註五經といふ經は五經に限らざる一集解不令五

之七經とありは猶佛經も兼ふとあり 經周易尚書毛詩春秋左氏傳禮記加周禮儀禮謂

五經の事は學令と云へし 佛經も兼ふとあり 經の題號 籍は文籍あり

集解凡所載之言謂之經經常也所記之策謂之籍籍といへば史記漢書の類類ときふゆ籍は簡牘と註註小六籍といへば詳かたは試みして六藝の書小礼樂射御書數をいへばふん又按た五經と云より六籍と記しよるもて九夷八狄あるの例り其次第をいへばつらばはひし事又諸史百家も亦兼掌するも同義て内外の典籍と廣くいふ云へし

圖書は絵圖文書ある事上下云々如し文書とは書生の學神功紀封重書寶府收書籍文書孝德紀大化二年詔小宜觀國々疆場或書持來奉示武紀十三年壬四月三野王等進信濃國圖同十年八月丙戌貢多祢國圖武聖武紀天平十年八月辛卯令天下諸國造國郡圖進ふとくさくの圖見えり給は畫佛雜畫あり畫仏の事註下圖書を河圖洛書といへば誤ありたまく圖書の字ちを混へる此河圖洛書を尚書孔安國注小昔伏羲氏王天下有神龍負圖出於黃河法而效之始以書八卦推陰陽之道知吉凶所在謂之河圖黃帝往洛水有大龜獻白書とり周易繫辭小河出圖洛出書といへるものにて聖人の代稀いづる瑞物をたて此察の掌ふべきなり

是を助けいへ周礼周礼辨其地域而為之河圖職制律の注小圖書者

鄭玄注謂畫其地形也見ゆれと洛書は河出圖洛出書是也取り誤る小取有唐制小秘書監の職掌古記治日修雅稟日權也云云國史謂當司所紀是也令邦國經籍圖書之事案案同修撰國史中務省四季別小申送公事祥災を記

當代の實録造り修を撰ひ定むるを此察は史館故あり集解小國史者史官所記之書假令如實録也如省より申送る内記の記せる御所の起居

注唐六典起居舍人の条修記言史録制詰祥災をも載雜令德固如記事之制季終以授國史准知陰陽察卷訖者季別封送中務省入國史と六典云史官掌修國書其事凡天地日月之祥山川封域之分昭穆繼代之序禮樂師旅之事史不虛美不隱惡直

誅賞廢興之政皆本於起居注以為實録然後立編年之牀為褒貶焉既終則藏之于府此察よ國史を修め撰むかる内典は佛書をいふ推古紀十四年五月

戊午勅鞍作鳥曰朕欲興隆内典云云二十八年小習内教於高麗僧惠慈學外典於博士覺加可佛書を内典内教儒書を外典といひ

佛像は畫佛の肖像なりし平氏太子傳書不為繪諸寺佛像圖莊嚴定黃文畫師といへ古より有りあり

五雜俎云唐宋以前
匣手多工神仙士女
竹木之形又云畫神
仙交相呈曜真形

書式 講說仁王般若 小釋迦牟尼佛並菩薩羅漢像一鋪五大力菩薩像五
鋪と見之り 鋪と見之り 今の懸物にて 宮内禮像御所の佛殿小佛像を居
置く禮拜の處をいふ天智紀十年十一月丙辰大友皇子在內裏西殿織佛像
前或説小西殿後真言院天武紀十四年三月壬申詔諸国每家作佛舎
彌勒の像を織織しを云あり

乃置佛像及經以禮拜供養の勅あれも宮中より佛像を置りては明らかり
註小宮中諸作の佛事は悉く佛供用を多し諸の事を多し即ち功德あり
禮拜讀經布施を 圖書式より宮中禮拜 三宝布施者收納寮庫聽官處分より功
奉るは多し功德を云

三宝は推古紀
小仏法僧と云

の義は僧尼 正月金光明令は毎年正月金光明經を讀む集會あり
最勝王經より十卷あり唐 天武紀九年五月乙亥是日始説金光明經于宮中
三藏義淨奉制譯と記せり 及諸寺と見之り 持統紀八年五月癸巳金光明經一百部送置諸国必取毎年
正月上玄讀之有り 正月の齋會は是時より始り久大政官式小凡正月於大極殿
講説最勝王經始自八月終十四日辨及史等專當行事より玄蕃式小凡每年起

正月八日迄于十四日於大極殿設齋會講説金光明經請僧三十二口沙弥三十四口
とあり 大極殿講説の始は聖武紀天平九年十月丙寅講説金光明最勝王 臨時轉
經于大極殿朝廷之儀 一同元日と記せり 此時より起りたり

讀般若を齊明紀六年五月小是月有司奉勅造二百高座一百納袈沙衣設仁
王般若之會とあり 天武紀十四年十月己丑是日説金剛般若經於宮中聖武紀

神龜四年二月辛酉請僧六百尼三百於中宮令轉讀金剛般若經為銷災異也
と見ゆ其轉讀の定日ふけは臨時といへり 圖書式小盧舍那佛並脇侍

菩薩像一合龍大般若經一部右二月擇吉日請百僧於大極殿三箇月修之
とありて春秋二季に此齋あり 後の制も小合龍は厨子なりててか轉讀あり
國家安全を祈り義あり 轉讀は終卷を互に移轉ありて 聖武紀神龜二年

七月戊戌詔云令僧尼讀金光明經若無此經者便轉最勝令國家平安也九
月壬寅詔始今月二十三日一七日轉經憑此冥福冀除災異焉同四年八月

甲申勅皇太子履禮佛轉經一日行道緣此功德欲得平復乎天平七年五月
病を記して禮佛轉經一日行道緣此功德欲得平復乎天平七年五月

已卯於宮中及四寺轉讀大般若經為消除災害安寧國家也今の世も般若は國家安寧の

義をもて轉讀の例は残まり猶僧尼令此卷の公書を多

四寺は在京の四箇の官寺なり公書を所へ置

一は圖書式九景涼佛像經典者起七月月上旬盡八月月上旬其所須綿紙並鋪

設等臨時請受九御書及因繪者六年一度景涼勅使辨官簡差諸司判官以

下及令人學生等堪事者分番檢涼記藏鑰者察申内侍奏請檢涼之

間勅使封鑰納寮あり同式を合字最勝經一部墨字最勝王經二十部仁王般

若經一部二卷墨字大般若經其官外の公事作善哉玄蕃省の掌は

一部と公書の名目をも載功徳あり

宮内は圖書官外は玄蕃の人の職を曉せあり在京の大安樂師元興等の官寺及

諸寺は讀經の事圖書寮預らる

校寫裝演各其匠手あり物字の故載

下の諸手は供奉の才伎長上ありて考撰をもて叙位の制あり

此諸手も同集解師説云令内称生元師者是得考之色有師者只免徭役耳令

例をへり弘仁三年七月廿八日官符造紙手少初位下奉公室成の例

之通例也と見え古記

二年三月是月聚書生始写一切終於川原寺此書生を互加岐訓

をいり年勞をもて考預

寫書手は經籍圖書内典を抄寫の書生あり天武紀

の義ありし今俗もま

書字を互加岐も訓

書手と云

前令は大宝の令ふる

下縫部司の条いへり

書史は書史を寫し訛字を校ふる

唐六典史館修撰の条校書四人楷書手二十五人

自觀中購天下書選五品以上子孫工書書史は雜々の儒佛の書あり國史あり

者為書手繕字内廊と書手のと見え

今の世も般若は國家安寧の

此卷の公書を多

公書を所へ置

在京の大安樂師元興等の官寺及

諸寺は讀經の事圖書寮預ら

校寫書史

才伎長上

令其制

免徭役耳

天武紀

寫書手

經籍圖書

抄寫の書生

天武紀

今俗も

書史を

校書手

唐六典

史館修撰

校書四人

楷書手

二十五人

自觀中

購天下書

選五品以上

子孫工書

者為書手

繕字内廊

言は字と云う如し長中 此書手は式部省も置りて類聚国史部職官 嵯峨天皇弘

仁三年十月己巳式部省書生員三十人省手跡令得出身此事今條 見ゆ

装演手の装は紙を截り脩の巻冊の装束を造るをいふ 装束は巻軸標袖を装ふ

云ふ集解古記大同三年十二月十五日官符云造帙長上 今の表紙をいへ冊子に造るを

右停止とありは此装演手を後造帙長上とやいふ 演は計を造り染色をいふ

あり圖書式は装演謂粘構界截及著標安帶軸といへ古より文書長紙

奥の難を患苦ひて染制ときこきて推古紀十二年九月始定黃書画師と見と皇

極紀中大兄の南淵先生 手把黃卷學周孔之道 比皆黄色に染むる黃書黃

卷といふあり宋黄山谷詩集天竺黃卷在注云佛書也 あり今も仏書は多く

汁入潢其紙或白若染成黃則年久而色黯以黃綾裝演謂大清本潢猶池也

外加綿則内為池裝成卷冊謂之裝潢即今様襍也とあり 按相は黃相とて今

も染色を用ふものあり様襍は表 民部式に九籍書者國家重案其所須紙染

黃藤葉とあり圖書式に九裝演長功日粘紙廿百張構紙二人日百二十張鹿闌

界四百四十八張 張別二 界長七寸二分廣七分注闌界四百八十三張 張別二 界長同

廣八分 横界五百八十八張 裝書四百二十張 截端及著標 中功 粘紙六百紙鹿闌界

短功粘六百張鹿闌界 見ゆ 界は地形の畫境をよめて四計の義あり

計伊比久と又云大政官長案料紙留年料紙内二百張毎年打進 辨官長案

料紙 毎月打進其規法者縦用鹿規横上四下一其食料白米一斛三斗大炊

横上四下一は横幅 又装演以一端充四百張の小事を記せり 四百張の卷冊を造り

は功程 みかく五界のみ在る云 又装演以一端充四百張の小事を記せり 四百張の卷冊を造り

みかく一 造紙手造筆手と同式は功庸の制を記せり 造紙手は穀紙麻紙を造

る匠手あり 和名抄り穀大 四員あり 大同三年二月十六日官符云圖書寮

造紙手元八人今定五人右左大臣宣奉初年料造紙其數不多所在紙手用造紙既

元食料云唯量所用造手有餘並從減省す 同年十二月十五日官符云停止並減

定諸司才長上事圖書寮造紙長上二員左減一員定一員加付水為恒例とあり

大同の格は二員とありは以前より二員を減せらるるなり 又云弘仁二年二月廿八日官符

造紙手八人を五人減せしむるは番上の手も長上にあたり 三九

△人日一百張、
注、蘭界四百張極界
四百九十張、
注、長書三
百六十張

偶、圖書寮造紙手少初位下奉公室成右檢案内大政官去大同三年十二月十五日

彼省符偶、右大臣宣奉勅偶、造紙長上一員、且從停止者、今彼右大臣宣福、奉勅前

長上奉部て足死去之替補室成自今以後依舊定二員とす、二員と定められた

り中務式給時服、造紙長上二人、唐六典秘書監の条より、造紙匠十人見たり、造紙匠は和名

抄り兼存此云紙有色紙檀紙穀紙屋紙河台紙斐薄紙等名を見ゆ、色紙は

九斗年料添造紙花二百六十八斗所須紙一千四百九十張云紅花黃藤支子淺蒲

陶黃楡紫藍七色の漆紙を記す、檀紙は即松皮紙を俗に引合す、大同初年の

名あり、唐書日本傳、德宗建中元年日本国使者真人興能献方物能善書其

紙似關而澤人莫識、と見ゆ、實退録、唐時日本出松皮紙といへ、此紙あり、穀

紙は穀皮をもて作す、即ち楮を俗に加字曾とす、その字書す楮木白皮葉

長實、似覆盆子木不能高大といへ、穀、異なり、穀は今加知といふ其業廣きもの

實のち、ときか、紙屋紙は山城國神屋川にて造る、その名を負ひ、反古のまき

か、といへ、今水雲紙給旨紙といふ、河苔紙は紙譜に海人以苔造紙と見ゆ、唐の陸

龜蒙の詩、倭僧留海紙とあり、そのふむ斐薄紙は谷、雁斐の木、され、此紙は後

とふものあり、加字比は紙を延べ、語、き、ゆれ、斐、造、薄、紙、を、云、り、され、此紙は後

と造り出せるものにて古の證、云、推古紀十八年春三月高麗王貢上僧曇

徵法定、二僧の、日雲、徵、知、五、經、且、能、作、彩、色、反、紙、墨、と、見、ゆ、れ、皇、國、に、て、紙、を、作、り、始

は、此、僧、の、推古紀十八年、隋大業六年、唐の時、高麗貢、鑿、紙、即

傳、白、壁、立、建、中、元、年、使、者、真、人、興、能、獻、方、物、興、能、善、書、其、紙、似、關、而、澤、人、莫、識

明の王世貞、金州稿、選第五、日本国出松皮紙、松下見林、松皮紙、即、關、紙、今、檀、紙

也、有、大、高、檀、紙、中、高、檀、紙、其、紙、礫、似、松、皮、と、云、按、大、高、高、字、あり、高、麗、の、紙、名、を、比、後、不、穀、麻、の、二、色、を、作、り、出、せ、り、蔡、倫、以

生布作紙、名、麻、紙、倫、之後、有、左、氏、邑、善、造、紙、と、記、圖書式、九年、料、所、造、紙、二、万、張

注、今、俗、取、穀、楮、皮、為、紙、號、穀、紙、は、異、國、の、紙、の、始、也、
廣三尺、寸、料、紙、二、千、百、斤、一千五百六十斤、穀、皮、
長一尺、寸、料、紙、二、千、百、斤、一千四百斤、斐、皮、
九、造、紙、者、調、布、大、一、斤、斐、皮、五、兩、造、色、紙、三、十、張

穀、皮、斐、皮、各、一、斤、造、上、紙、各、三、十、張、
古は調布を穀斐を、紙を作れるあり、楮は
加字曾と紙麻を、麻紙といふ、此類なり、
筆、手、は、筆、を、作、り、匠、十、員、置、り、は、集、解、古、記、大同三年二月、官符云、圖書寮造筆元六人

今定三人、三年中造筆有定數、臨時且備供奉唯量所用造于有餘、並從減省、
二月十五日、官符停止、並減定諸司才長上事、圖書寮造紙長上一員、右減一員、
造紙筆長上一員、造紙筆長上一員、造紙筆長上一員、造紙筆長上一員、
造紙長上右並停止、件司等長上數停止、並減定如件、永為恒例、
見、造、紙、筆、長、上、造、紙、長、上、右、並、停、止、と、り、同、時、の、格、
造紙造筆の長の
下、上、字、脱、了

造紙長上右並停止、件司等長上數停止、並減定如件、永為恒例、見、造、紙、筆、長、上、造、紙、長、上、右、並、停、止、と、り、同、時、の、格、
造紙造筆の長の
下、上、字、脱、了

造紙長上右並停止、件司等長上數停止、並減定如件、永為恒例、見、造、紙、筆、長、上、造、紙、長、上、右、並、停、止、と、り、同、時、の、格、
造紙造筆の長の
下、上、字、脱、了

造紙長上右並停止、件司等長上數停止、並減定如件、永為恒例、見、造、紙、筆、長、上、造、紙、長、上、右、並、停、止、と、り、同、時、の、格、
造紙造筆の長の
下、上、字、脱、了

造紙長上右並停止、件司等長上數停止、並減定如件、永為恒例、見、造、紙、筆、長、上、造、紙、長、上、右、並、停、止、と、り、同、時、の、格、
造紙造筆の長の
下、上、字、脱、了

造紙長上右並停止、件司等長上數停止、並減定如件、永為恒例、見、造、紙、筆、長、上、造、紙、長、上、右、並、停、止、と、り、同、時、の、格、
造紙造筆の長の
下、上、字、脱、了

楮穀種即今楮樹皮
汁並紙穀皮可造紙
楮穀構同類異名

字書云、葉木葉似楮
不、文、朱、如、栢、實、有
仁、可、食、即、榲、子、未、可
為、几

唐の紙書、白麻
黃麻の紙を用ふ

かくて筆の始は新撰姓氏錄未定筆氏燕相國衛滿公之後也善造筆預干

士流因茲賜筆姓とあり 皇國に未化は何の御代とも知れず 東國通鑑に漢

高祖起兵滅秦 秦人衛滿走降朝鮮後為相國逐其王箕其準奪國自立為王其孫石渠采之

時漢武帝遣兵擊朝鮮元封三年滅之とありは此後衛滿の子孫皇國に參

同し状は見えたり 又朝鮮の相國此筆氏の作すといふる筆も定むきふあはれ

は秦人なれど秦筆もといふむ 漢籍に秦蒙恬取兔毛始造筆と見ゆは兔筆

蒙恬作秦筆耳據諸說筆非自始始也莊子曰宋元君画圖象史皆至受

揮而紙筆和墨とあり云り今按り此說誣言なり古の筆は竹筆にて工匠の筆

の如く墨をけけは漆汁を以て記せり古今注の如くは毛筆と定の、くは

羊毛為被所謂蒼云々一紙筆といふは猶竹筆なる事明なり毛筆と云ふは

毫非免筆竹管也 免筆あり鹿筆も古く見えて万葉集第十六 詠二首

小佐男鹿乃來立嘆久頓 爾吾可死王尔吾仕年 云 吾毛等者御筆波夜斯吾皮者御箱相皮云

と詠り圖書式九免一管寫真行書一百五十張注一百張墨一廷三百

張鹿毛一管界六百張 注は書の註ふ 九造筆長功日兔 毛十一管 同上

鹿毛三十管中功日兔毛十管鹿毛二十五管短功日兔毛八管鹿毛二十

管より字年料に王經十九部一卷用紙七百一十張免毛筆七管鹿毛筆二管堺

料と免鹿の二筆を記せり 古は免筆と専ら用ひたり 唐六典秘書監条に

歲給河間清河博平四郡免千五百皮為筆材とあり

鹿の事は 大政官式九免充諸司月料紙筆中務錄數吏官即下符中務令

見之 充諸司每月下旬末受月料とあり 諸司の毎月 圖書式 諸司年

管と見ゆ 唐百官志に秘書監条に筆匠六人校書郎条に 掌造筆の筆を

供進筆二人造筆直四人筆也二人と見ゆ 管は札記内則注に管筆軀也といふ今の筆柄あり

板木に管と誤りて人改む 詩經の形管は赤色の筆軀をれた是より誤りたりとあり

造墨手は墨を造る匠あり推古紀に十八年春三月高麗王貢上僧曇微墨微

能作紙墨とあり 全文は造紙手 此僧の教造るゆゑなるむ即ち高麗墨あり

漢籍に唐初高麗貢松烟墨用老松燒烟和鹿角膠造成為片唐末墨工

奚廷邽倣其法為之宋時張遇供御墨始用油烟入麝香謂之龍香劑とあり

今俗墨の名不煙す 劑の字を用やは是より始り中華古今注に上古無墨以

五雜俎云楊雄用鐵 硯東魏孝靜帝 用銅硯は墨溜ふ 今硯ニアラシ

升二日二夜成墨九十三挺長五寸廣八分料膠中功日燒烟九年煮烟九升成墨

八十挺短功日燒得烟七斗五升煮烟七升五合成墨六十六挺見ゆす充諸

司月料六挺年料五百十九挺右年料墨具依前件正月惣充但月料八月

一日依例充之也唐六典秘書監校書郎造墨之事見之高麗墨を多く用

百廷播磨国墨三百五十廷大宰府墨四百五十廷見ゆ古へ此三處より製り

出せし今は絶つる中より純州年妻郡藤代卿より墨を多く出して其名高

清熊野より歸詣て来るとき墨を侍ると尋ふ小あまきより申うられんとあり

此寫書表演造紙造筆造墨の五手は別職多きを寮使部より以前より連ね記

せれば中務省の内記以下典鑰以上を管隸例り同し又功程給紙筆墨

の義も右に在る圖書式使部二十人は式部式圖書使部十人

と仰り後了史生寮掌を置たり史生は同式圖書寮史生五人権入す寮

掌月類聚国史第一百七職官部貞觀八年三月丁酉圖書寮置寮掌一員といへり

和名抄書式部式寮掌見たり紙匠造紙の部匠此匠人の紙を造り出さる職業と

せり上文より造紙長上此紙匠の紙を造り手は管せらるの筆匠墨匠

を定められ集解古記紙匠五十戸山代國自十月至三月毎戸役一丁

為借品部免調雜徭也借品部は品部の名を借し其例り圖書式紙匠山

城國五十戸と記せり同式此紙匠造り進む數を記して充諸司月料一萬八

千四百張年料三千二百四百張といへり年料は諸司の外賦役令九雜戸陵戸

品部並免課役集解品部謂取良人配隸諸司といへり品部は召役の種品を

口分甲給の輪租其れを農月は諸司召役の制あり閏月造紙の猶下条

役り監使故は自十月至三月といへり紙匠を俗に紙の職令て一組ありと云

百落戸大藏省狛戸其餘の雜戸品部多かり照見て其義を曉る

内藏寮

頭一人掌金銀珠玉謂自生為珠寶器謂金鐔玉錦

下作為玉也謂金鐔玉蓋之類也錦

綾雜綵氍毹 謂燃毛為 諸蕃貢獻奇偉 謂非常之物

雜物皆自大藏省 謂席者也 之物年料供進御服及別勅用物

事 助一人 允一人 大属一人 少属一人

大主鑰二人 掌主當出納餘主鑰准此 少主鑰二人

掌同大主鑰 藏部四十人

價長二人 掌平物價市易 謂猶言下評價 餘價長准此

典履二人 掌縫作靴履鞍具 謂此為 及百濟手部

百濟手部十人 掌雜縫作事

使部二十人 直丁二人 百濟戶

内藏寮は和名抄に宇智乃久良乃豆加佐とありて宮中の庫藏を掌り藏は雜物を收貯之處と名ありて物を畜ふ處也此藏の始は履冲紀六年正月辛卯始建藏職因定藏部と古事記履冲天皇於是是以阿知直始任藏官と見ゆは古語拾遺に至於後磐余稚櫻朝三韓貢獻云齋藏之傍更建内藏分收官物仍令阿知使主與百濟博士壬仁記其出納始更定藏部細書齋藏内藏大藏と見ゆ皆同傳へて内藏の號も見たり此時を始めるとき持統紀に内藏寮允後磐余稚櫻宮内即履冲天皇の大宮なり此時を始めるとき持統紀に内藏寮允大伴男あり全文は大監物内藏寮式に凡寮庫雜物者先種別自正倉移納於

別庫而後下用と云 正倉の例より別庫を建て臨時 此倉は小倉の例を大同年

格大元少元二員を置しより 大寮と云 九一人を小寮とし大元少元を大

二云 金銀は黄金白銀と云 其色を名 皇國は古より金銀を 韓國より奉

て始は神功紀新羅國を討 責金銀彩色云 令從官軍を 韓國より金銀の

紀素美鳴尊曰韓卿之嶋是有金銀す 仲衣紀八年秋九月己卯有神託皇

后誨曰云有向津國眼炎之金銀彩色多在其國是謂務食新羅國と見え

推古紀十三年子高麗國大興王聞日本國天皇造佛像貢上黄金三百兩孝德

紀營墓の制無藏金銀銅鐵す 冠制 錦冠以上之鈿雜金銀為之天武

十年三月辛丑詔親王以下至千庶人諸所服用金銀珠玉云服用有差の

制度を立ればは奇偉の宝物の故あり 大宝令條を撰てて日も同かる

比後聖武紀天平九年二月丁巳陸奥國始貢黄金と始て皇國より黄金の出

事を記せ 此事は雜令銀も持統紀五年七月壬申是日伊豫國司田中朝臣法

麻呂等献宇和郡御馬山白銀三斤八兩鈿籠と云を始めあり 鈿は練熟

り紀鈿を阿 良加称とあり 珠玉は二事あり自然に生るる珠も 人工を以て造り磨くを玉といふ

る和名抄 宝貨 小海出明珠 日本紀私記云真 四声字苑云玉白石 和名玉石也と云

さらば珠は真珠蚌珠の類あり海中より出るを小玉は白石寶石の類あり山野

いづれかふ名あり 管子玉起 漢珠起於赤野といふ此説ありと云れと云へは

一又玉も自然生るものあり 宝經九石韞玉者取石映燈視之内有赤光如日初

出即知有玉也今も純伊國牟婁郡熊野玉の浦といふ處あり其縁海地の石中より自

然生る黒玉あり光澤ありと云 宝器は奇宝の器物といふ金罇玉盃といへり罇と

陶器あり瓦を罇と云 木を樽 蓋は酒杯あり 是も木を杯盤皿 共り酒器を云 宝

器といへは金玉の限を以て作るあり 飾鏤の器と 天武紀朱鳥元年夏四月新

調進 鏤金器及金銀霞錦見え 孝徳紀營墓の条珠襦玉押と云 具あり並葬

の条 鏤金器及金銀霞錦見え 令云て或説い宝器は神宝なりと云はひる言

る此倉の掌 錦綾は下 賦役令 雜綵は五彩の類ありし神

功紀彩絹志美乃岐沼と訓て猶下 東宮職 云て 板本に綵一字ありは雜字脱せ

職員令に錦綾 或説一事と 秘抄に氈毛席也和名賀毛と

雜綵と連ね書せり 氈襦二事あり 或説一事と 秘抄に氈毛席也和名賀毛と

猶狀似猪穴居尾短
短褐色毛尖喉能乳
地食虫肉
又云備猪鬃有海猪
皮可為裘領

あり天武紀十年三月辛丑詔小氈褥を於利加茂止古志岐とあり於利加茂は加茂
一をいへと加茂ののみ云は略語なりし和名抄小鹿靈羊和名加万之之とあり加毛之之
らむ皇極紀も頭髮班雜毛似山羊の山羊を加毛之と云ふ今世の綿羊と云
ものにて白毛の獸をいふ 褥は和名抄茵和名之士称茵褥也又以虎豹皮為之此間迹久今
案毛席名也俗以猪皮等為之と云獸皮をいふ 鋪皮をいふ天武紀止

古志岐和名抄之士称訓は同義なき

止古志岐は席の鋪をいふ之士称も鋪き

鋪皮を用ふ

註了毛を燃り褥席と云ふは鋪皮を云ふは此註は氈褥の註を

二物とも毛を燃るをいふ詳なりと云ふ和名抄野王日氈毛席燃毛為席也説文
氈燃毛也蹂毛成片故謂之氈とありて是も席を用ふと云毛氈あり褥は茵
褥をいふ其狀ことあり氈は織り二事を見ても妨げなるべし 諸蕃は皇國の蕃
造るを褥はとも用ふるものあり

屏を諸夷をいへと新羅勃海夜久の國をいへ蕃は薩と同じ貢獻の 奇

瑋は皇國不産奇異珍偉の物を廣くいへり故に非常の物といへり外國より 参考

香藥の類之物は奇偉之物の義を上下屬へし 註は金銀以下奇偉空

雜物は先づ大藏省に收貯へ此卷に割り合て送るべきとありと云ふ大藏省は

諸方貢獻雜物を畜へ此卷は供御別勅用物を收むる故あり 年料供進御服

は供御常例服用の御物あり冠服調度 内藏式に諸司年料供進御冠羅四疋

一疋羅二十三疋綾四十疋白廿疋 色廿疋 綾三十疋 色二綾四十疋 錦四十疋 兩面四十疋色は

二色は白と色とあり 九毎月十三日二十七日為出御服雜物之日す 九奉行御

服物之日出納諸司與内藏寮官人相共入庫選進あり諸司は中務官人 監物等あり

別勅用物は臨時別勅を以て供用の雜物にて人給ひの物なりし年料の外 あり

別勅の公式令便奏賜衣服塩酒菓食並給醫藥如此小事之類並為便奏

とあり是も年料の外 内藏式に織部司臨時所織進御服八十一疋臨時所定額

二十八人夏冬衣服絹六十三疋大藏式に九諸國所貢絹擇其最美一千疋每

年別納す 九諸國所貢染布先割置年料云以其所遺充臨時用といへる

臨時は別勅の用度なるべし 集解に比司雜物支度一年用物自大藏分受毎月別

貯出用也倉庫令云大藏准一季應須數量出別勅 隨用出給其内藏即納

一年須物アツルモノハ每月別貯出用並乘者附帳欠者隨事徵罰見ゆは一年用物を貯ふのみして臨時は大藏省より供用の員數に隨ひ出立事ありし須は用同し乘て餘物を云

助一人中務式部内藏寮助一人職原抄イ 允一人を集解大同

三年七月十六日官奏曰加置官員事内藏寮今加少允一員右件供御忙劇兼候別勅伏乞更加件員云云云云類聚國史小も同格を記し是より大小二員を置きしふも中務式部内藏寮大允一人少允二人と見ゆ少允元と云は後イ加置れり一を二と誤れ

加内藏寮少屬一員と仰り中務式部大屬一人少屬二人見ゆ大同三年七月位上大屬從八位上と官位の制あり 主鑰典鑰の職も同く鑰をもて此寮の庫藏を開

閉の職あり典鑰の名を避て主鑰といへるあり 主當出納は雜物出納を主當たるを云主當

義は大政官此主鑰は古く見えて古語拾遺小至於後雅櫻朝云云齋齋藏内藏大藏令秦漢二氏大少四人を故桓武紀延曆十八年夏四

為内藏大藏主鑰といへり

月辛丑齊内藏寮主鑰四人置少屬一員とあり類聚國史三 此後は少屬の兼職とやありけむ鑰は關司御所は關司の女官をいふ其 内藏寮

等出納耳鑰皆在御所故也と記せり御所は關司の女官をいふ其 内藏寮票注此文小依り小監物も預りや 監物は各藏出納監檢の官あり

允藏匙者屬以上一人先觸左近陣官率史生入日華門請納とあり主鑰も 其種を

用盡之前復移納勿令斷絶開正倉者助以上一人其允屬開之とあり 用物其種を

別て別庫小納め置て尋常は正倉を關開くは云云 餘主鑰准此の餘は大藏省の主鑰ありし

藏部は雜物出納の馳使して神祇官と神部あり倉庫の内は他官を入るべき 其員四十人あり故後減せられて内藏式部藏部四人中務式部内藏寮

藏部十人と見ゆ諸司の例より 是藏部も各員氏を用ふるあり姓氏錄に内藏寮稱す藏人の氏姓を記せり 價長は官物をもて用物を市易の價長あり市肆商家の估價を定め市易の職あり 贖物の價を定の

出賣をも兼る三代實錄貞觀八年十二月八日己卯是日没入唐人伴

延曆十八年正月
齊大藏寮始建
藏寮因定藏部
トアリ

善男宅地資財付内藏寮とあるも収没て官物と定むる故ふる一按
別勅用物を掌る有司の罪人の財を付る有るべき長とは市易の首領
理ふれと官物の餘を出し賣の縁よりてかく付るなり
をいへり 長を置て其属なきは 平物價は雜物の奸偽を防ぎ常例
商家多し隷する故あり

の估價は後ふをいふ 上中下等の相場より立 弁帝紀天平宝字七年四月甲
定て其直の平直を云

成京師米貴糶イタシラ左右京穀平穀價也刑部判事式より平賦布者

長五丈二尺廣二尺四寸為端と有り此文にて平の義を知り米價の貴
穀を糶して中價よりしめ賦布も長短狭少かく正しく 註し評價と

常制よりあり賦役令より布端長五丈二尺廣二尺二寸と有り

いふ其價の直料を評定むるをいふ其評は上中下の三等を定むるなり
按し平は中估よりしめをいへり 市易は交易と云なり 立調其弄説の物は臨時に
評と云も同義なるを委く云ふなり 交易の事有らば唐

六典倉部郎中掌官 餘價長准此は大藏省及東西市司價長をいふ選叙
市交易之事と見えたり

令は價長免雜徭とあり去て京師は正役なく雜徭のみふれかくしり 諸國
は徭役ありて同くは給は輸租は同制あり

京中も男女共給は輸租は同制あり 典履は靴履を縫作る職

長上あり 典は掌るをいふ典 此職は百濟手部人を率ひ供料を造らむ其長
をいふ 造紙手の紙戸價長の 集解大同三年十月十五日官符云停止並減定諸司
價人を率ひ仕奉る例あり

才長上事内藏寮典履二員令減一員定一員云云永為恒例と有り 此時造紙造
員を減せられり此格文日本後紀同三年 中務式より内藏寮典履一人と見ゆる類
六月庚子停内藏寮御履長上一人と有り

聚國吏 第一は平城天皇大同元年十月辛亥勅曰典履二人百濟手部十人 百濟典
百七

華一人狗部六人狗右伴人元大藏省之所管今右大臣宣奉勅伴人等自今以後宜隸
内藏寮許之と此寮を併せられりこと見ゆ 狗は高麗より此格集解より下大藏
省典

華の 条云一 靴履は和名抄より履靴 華曰履和名久豆 用踏靴和名化乃久都
錦鞋 此間骨 以綵為之形如皮履 綵綾 靴 靴鞋俗為柿字未詳見履也
今開 一采也 見内藏式より柿鞋と有り

比類を靴履といふ一内藏式より別縫造御靴一兩柿鞋一兩 已上 御料寮月別縫
造御靴一兩錦鞋三兩 中宮 雜給錦鞋五兩云云 毎月晦日先進奏狀一通 御料
一紙雜 六月十二月神今食土月新嘗料別柿鞋一兩送縫殿寮 不御寮所之時
給料 以雁鼻當代

給料 六月十二月神今食土月新嘗料別柿鞋一兩送縫殿寮 不御寮所之時
給料 以雁鼻當代

給料 六月十二月神今食土月新嘗料別柿鞋一兩送縫殿寮 不御寮所之時
給料 以雁鼻當代

給料 六月十二月神今食土月新嘗料別柿鞋一兩送縫殿寮 不御寮所之時
給料 以雁鼻當代

給料 六月十二月神今食土月新嘗料別柿鞋一兩送縫殿寮 不御寮所之時
給料 以雁鼻當代

給料 六月十二月神今食土月新嘗料別柿鞋一兩送縫殿寮 不御寮所之時
給料 以雁鼻當代

給料 六月十二月神今食土月新嘗料別柿鞋一兩送縫殿寮 不御寮所之時
給料 以雁鼻當代

給料 六月十二月神今食土月新嘗料別柿鞋一兩送縫殿寮 不御寮所之時
給料 以雁鼻當代

給料 六月十二月神今食土月新嘗料別柿鞋一兩送縫殿寮 不御寮所之時
給料 以雁鼻當代

排す縫作雜履料靴料牛革練絲二分漆四勺鈔一兩二分造御靴料楮毛
 十兩牛皮六張半深紫綾二丈四尺三寸排鞋十五兩西別料面淺紫綾長
 九寸廣一尺七寸裏白綾長九寸廣一尺五寸中黏絹長九寸廣一尺七寸底
 牛革二條長九寸廣二寸履白綾長九寸廣九寸履は久豆志綿一分皺文章
 一張長七尺廣五尺五寸裁得靴一兩鞋底十二兩す皇后錦鞋三十九兩
 兩別錦七寸中縹絹八寸生絹七寸調布二尺練糸一分調綿一分紙三枚と
 委くいへり 鞍具は鞍得鞆鞍鞆の類馬を装ふ具をい 此乘具皮別は冠
 服志いへり其 註こ此為供御也は此典履の掌ふは供御料ををいふ大
 文長れ省けり 藏省の典履よけていへりり大藏省は賞
 賜の料あり
 供御は重く賞賜は軽き差
 別あり猶下
 縫作は練糸もて靴履を縫ひ作る故あり 掌云百濟手部は典履の比部人
 を惣掌の故あり 百濟手は手伎の革匠なり 凡獸皮生目皮理之曰革 肉藏式は
 柔之曰掌との差別あり

作手廿二人のは此手部を計へり詳から此項は功庸を用字事多く記せり
 革匠は古へ百濟國より参来 始は其革を造る功庸は内藏式は牛皮一張長
 其手七後よか言人猶猶手の条云一 其革を造る功庸は内藏式は牛皮一張長
 六尺五寸廣五尺五寸 すは生除毛一人除膚肉一人浸水潤釋入 流水を漬置て潤
 を曝涼踏柔四人 日は暴風を涼めて 漆皺文章一張 長廣同上採極皮入合
 和糊鹽漆造四人漆皂革一張 長廣同上燒柔薰烟一人漆匠二人鹿皮一張
 長四尺五寸廣三尺除毛曝涼一人除膚完浸釈一人劑暴和腦槎乾一人半と云
 へり 牛皮を革と造る功七人漆を切五人 古は拍部の職をもて左馬寮式は寮馬
 鹿皮の功三人半の功程を用ひたり 牛斃者云唯御靴料牛皮七張充内藏寮といふも此料ありとて百濟手を供御
 物を縫作せ得考の人といへり 集解は師説云百濟手部不可得考也松
 大藏省義解云百濟手部拍部謂並是得考者也彼省所造此為賞賜也此寮所
 造即は為供御也賞賜之人既得考撰供奉之輩知亦可得考と見は解云守
 辰丁是亦不得考之人中取長者為博士得考とあり此守辰丁は供奉の人なり此説
 予れは百濟手を考を得と典履とありて考を得下供奉の人も得考と定めかざる人

雜縫作は雜の下履字帳なるが、内藏式に縫作靴履を縫作は此手部の

り手部の縫作り典履の檢校を供進す。使部は二十員を式部式内藏寮使部十人といへり又

此寮は後舍人史生寮掌を置たり舍人は中務式内藏寮舍人三十人あり

其初置は考か、内藏式に勅旨舍人史生は類聚國史職官元明天皇和

銅元年七月丁酉内藏寮始置史生四員内藏式に凡番上史生四人中務式給時

寮史生四人とあり、史生内藏寮史生十人權史生二人と記せり類聚國史大同四年

史生二員と見ゆ、元六員あり、寮掌は同國史云陽成天皇元慶四年五月廿

後、正四人權二人を加へられむ、寮掌は同國史云陽成天皇元慶四年五月廿

五百成寅内藏寮置寮掌二員其衣糧以藏部料内給之見ゆ、百濟戸

は革細工の部あり百濟手は此戸に簡ひ定め品部とふれり、大藏

省の狛戸は革韋を作り此存縫作を業とする、其始は百濟人なる事

選叙令に雜戸部免調役といり集解に百濟戸十戸在京六戸紀伊國四戸

臨時召役為雜戸免調役と見ゆ、臨時召て縫作を役せり、戸を雜戸三代

實錄に天安二年十月廿六日癸未左京職言毎年進百濟品部戸等計帳無益

於公家有煩於職吏請除棄而不進從之と見えて是より此戸の計帳は停めら

れけむ、左京に住める百濟戸計帳は此職の掌故あり

縫殿寮

頭一人掌女王及内外命婦宮人名帳考課謂内侍司以下

十二司之考課即本司錄上日行事送於此寮寮定考第申中務省以内侍司無男官故也其縫女采女

等考者本司校定直及裁縫衣服謂此擬御服並為送中務不由此寮也賞賜其縫司亦同

也
纂組 謂並綬 事 助一人 允一人 大属一人 少

属一人 使部二十人 直丁二人

縫殿寮は和名抄に奴比止乃々豆加佐とあり年料御服を裁縫の司ふり此寮に殿字を加へるは諸寮に異ふを知るべし供御の服用を縫作は諸寮の中より中務省宮内省といふ縫殿此はもと心寮の制めある代集解古記の延暦十八年七月廿一日官符云縫殿寮准大寮事右被右大臣宣奉勅件寮加九員以置大小宜准大寮とあり允入を小寮と大少二員類聚国史職官平城天皇大同三年正月壬寅詔は縫部司米女二司といふ事見之弘仁三年二月乙亥分縫殿寮官人三十人配大藏省以縫幄作幔等類也といふも此寮に縫部司を兼る故あり米女司は弘仁三年二月庚戌復米女司と同國史と見ゆ此縫司は大藏省に隸けは其處云々

女王及内外余婦官人名帳考課

は此寮婦人仕官の本司として考文を作り其等第を定めの中務省より送り婦官の行事上目と送り長官其記文の功過毎年其名帳を省より送り此寮に其名帳を掌るべしを檢て其等第の考文を定む即ち中務省の女王内外余婦官人名帳考叙位記と記せらる此事をかく考文は選叙令に九應叙者本司八月二十日以前校定云於限内處分畢といひ註此寮女官物考を後宮内侍司以下の十二司考課其本司上日行事のみを記此寮より送り寮考第を定めの中務省より申せば内侍司は皆婦人にて男官なく考文を作らざる故あり其縫女米女等の考文は其本司ありて功課を校定め此寮の例も同く考文を中務より申せり故に此寮はより其本司ありとあり十二司は内侍司本司に縫女は縫集解に名帳後宮職員令女官所管亦此司重知耳といひ女官所管は内侍司に名帳ある代此寮より重て名帳ある考文を定む故に考文と名帳の両所ある代論より裁縫衣服は供御の料臨時の賞物賜物の用皮を裁縫をいふ集解に裁縫衣服謂勘掌女官之縫也非當司別縫作也人賜之類亦此司所知也又云御服並人給服也

分配女司所餘者可充彼縫司然則此司共彼司相縫耳といひ後宮職員縫司あり
此寮より綾帛を送り其女司縫司むれは此寮彼司と互に裁縫の事を知る一男官ハ
裁縫也（きまあるは御料を貯）置て臨時の用度充（但一當司非別縫と云は違ひり
當司も縫女はあり一本又
小見之れと縫部司の文又按よ分配女司所餘者可充彼縫司といひ縫司は女官をいひ
考（知）し互に通はたり
然る一縫部司の義とせなあるに
女司縫司は二司を縫部司と云ふ似たりは雜給料の衣
服を御料を異なり其司の縫女部も此寮より召役のことは
有（られ）女司の餘り御料を
縫部司より下（さ）さるるなり
註よ此裁縫は御服之擬也（擬はたかり定の
持つ義あり並賞賜の
為よ縫司同といは精かた
縫司は女官より御料賞賜を裁縫之事の同義をい
其文足らて此寮より縫女あるは縫殿と名を負ふるは縫殿式小年中御服春季袍十
委（わ）らぬなり
領白椽六領 襖子藍四領 蒲 半臂十領 藍四領 汗衫十領 藍四領 袴襦單袴
淺紫四領 菊六領 紫六領 各十領 紅表袴中袴各十領 腰袷單袴各十領 被衣八領 被十條 並紅袴四條
各十領 並紅表袴中袴各十領 腰袷單袴各十領 被衣八領 被十條 並紅袴四條
並襪絶一疋 夏季著襪穀衫六領 白椽四領 藍 半臂十領 料 汗衫十領 上云
右四季御服並依前件每年依數從内藏寮受之准例添縫と縫裁の事をいひ又且料

一日十六日兩般均分供進といひ月別一日十六日は内藏寮の纂組は俗小平打緒
丸打緒をいひ註よ緩屬といひ緩は物をいふく組緒なり縫殿式新羅組一條
長丈餘組准比 絲二約兩 紋組一條 絲一約 大丸組一條 絲五兩由丸組減半 あり和
各抄の服既緩礼記注云緩和名久美 又用組といひ緩組は 允入は
集解古記小延曆十八年格云縫殿寮加允員以置大少員と見の 此格全文は初糸
員を始 中務式小縫殿寮大少允各入あり 使部は式部式小縫殿寮使部
十人といひ 同式小史生 大同三年の格は縫部司内注司を此寮小併せしるよ
り其職掌も置れり 集解古記小大同三年十二月十五日官符小縫殿寮添師二
員右亦停止以前右大臣宣傳奉勅件司等才長上數停止並減定如件永為
恒例と見由 上文造紙造筆手の糸よも此格文を載り其職掌は縫殿式小允添
衣服糧米不縫 主殿寮家直受允凡仕女二人
日功養物勘納寮家充給と雜色の事を記せり

陰陽寮

頭一人掌天文曆數風雲氣色謂天文者日月五星二十八宿也曆數者

計日月之度數而造曆授時也氣色者風雲之氣色也言以五雲之色視其吉凶候十二風氣知其妖祥其

天文博士職掌唯言氣色不言風雲者舉氣色則有風雲可知故也奏聞事

助一人允一人大屬一人少屬一人

陰陽師六人掌占筮相地謂占者極數知來曰占也筮者著曰筮也相者視也

陰陽博士一人掌教陰陽生等

陰陽生十人掌習陰陽

曆博士一人掌造曆及教曆生等

曆生十人掌習曆

天文博士一人掌候天文氣色有異密封及教天文

生等 天文生十人掌習候天文氣色

漏尅博士二人掌率守辰丁伺漏尅之節

守辰丁二十人掌伺漏尅之節以時擊鐘鼓

使部二十人直丁三人

陰陽寮は和名抄に於半夜守乃豆加佐とあり音訓を用ひり陰氣陽氣を候ひ望

み天文を志し義をもて名を負ふる也宗神紀に陰陽を奈豆布由とあり陰陽の盛

陰まじり日為正陽月為正天武紀四年春正月丙午朔陰陽寮云と見え奈帝紀

天平宝字二年九月甲子官奏陰陽寮陰陽曆數國家所重記大事故改為大

史局とあり同年九月丙辰復陰陽等といへり唐百官志司天臺の条に武德

四年改大史監曰大史局とあり此号を摸天文ハ天象の文理明くはらるるをいふ文理は曜映の正日月五星

二十八宿は皆天文と云下漢天文志に凡天文有因籍昭昭可知者經星常宿中外

は二十八宿あり五星は東方歲星南方熒惑中央填星西方大白北方辰星斗率牛

小配二十八宿は東方自角至箕角亢且心房尾箕の南方自斗至東壁斗率牛

室東壁の七宿あり西方自奎至參奎婁胃昂畢觜參の北方自東井至軫東

輿鬼杓張翼軫の七此星をいへり四方各七宿まで二十八星あり鄭玄說小環

星あり十八次曆數は周天日月の運動を計り推て曆を造るをいふ曆は曆數は計數也

と見え曆數は周天日月の運動を計り推て曆を造るをいふ曆は曆數は計數也

數を推漢律曆志に黃帝始造曆と見え和名抄も同史記封禪書に推策注云

日辰之將來也といへり後漢劉歆始定積年日曆法以為推步之準とあり

推歩の術は始りては天の度數三百六十五度四分度之一を以て日月行道を推

一其歩の遲速疾舒を計り求むるの法あり一歲を三百六十五日四刻

を知り日用をお母は古より國家の重事とせり上よいる奈帝紀の官奏を併せ見

目天曆象日月星辰下曆博士の条に雜風雲氣色は五色風氣ふる一

漢籍小天之氣 雲小五色あり十二時の風氣小吉凶の兆彰たり左氏傳僖公五年

息者風也といへり 雲物為備故也杜預注小分春秋分至夏至夏至啓在春在夏開在秋在冬 雲物氣色災祥也孔穎達疏小物謂氣色者非雲而別有氣色杜恐與雲相乱 故云氣色といへり春分秋分夏至冬至啓開蟄は時氣變動これ其雲物 と候ひ望み一歳中の吉凶を知るこれ其備をさす 見之此職を國家の重事とさる

五雲は周礼春官保以五雲之物辨吉凶水旱豊荒之稷象鄭玄註 小二至二分觀雲氣青為蟲白為喪赤為兵荒黒為水黄為豊雲色の青白赤黒黄を以て冬虫

五穀成熟無雲為飢也有青雲氣大熟有疫疾赤雲氣大旱不熟白雲氣小熟 人民少不安黒雲氣小熟多水人民小厄黄雲氣歲大熟人民安樂蒼白雲

為小水若小疾蒼亦為小旱若小疾蒼黒為小吉有土穡人民病疾也此説は雲氣 十二時の風周礼保章氏 以十有二風察天地和乖別之妖祥鄭玄

注云十有二辰皆有風吹以知和不其道亡矣謂て其説見之注小十二風といへば 此とある下風氣を以て吉凶をさすは左氏傳襄公十八年傳小晋人聞有林正師師 曠曰不害吾曠歌北風又歌南風南風不競多死声楚必無切注小

歌者吹律以詠風南風音微故曰不競也史記天官書小漢魏鮮曰正月且决八 風風自南方來大早西南小旱西方有兵西北戎菽成北方為中歲東北為上歲東

方大水東南民有疾病歲惡といへり八隅を以て吉凶を知るなり後漢書郎 顛傳小字京氏曰風角注小角隅也候四方四隅之風以占吉凶見之十二辰の風候は

考按小風雲は上といへり説と同 氣色は異あり雲色風氣と二事小といへり 天文は風雲を限るきた あざされと 氣は陰陽の氣候色は日月星辰の曜色とやいそむ 氣は陰陽の

猶考ふに 暑の遅速失錯色は日月の食暈漢天文志五星所行鬪食彗孛飛流日月 星色の変異妖祥の類と多かる 薄食暈珥珥迅雷風祆怪雲変氣此皆陰陽之氣精其本在地而上

祭天者也政失于此則見于彼也と風雲のみの氣色をいへり 註小其博 士云云の義は其条子云一 奏聞は雜令小觀生云 其仰觀所見不得

漏泄若有微祥災異陰陽寮奏訖者季別封送中務省と 凡天文 妖祥は此寮の陰陽師 天文博士等小占候せし其異変を奏上するらむ

異変の祭は 時政の得失國家利害の天小何ら 故小奏上なり 唐志中六 典司天臺一人察天文曆數 凡日月星辰風雲氣色之異率其屬而 占と 委し 見ゆ 此陰陽寮も同職なり 本条小其要とせき 日月星辰を省き風雲氣色と ありなり 註も 天文の事をい 混ひ 助一人

云云は中務式小陰陽寮頭助允少屬各一人と有り後小史生を置り 陰陽

師て陰陽の術をして供奉の人をいふ師は其執業をいり歌師樂師醫師の師皆同

必しも教授の師は限らざるなり天武紀朱鳥元年六月庚午工匠陰陽師

授爵位同年正月甲寅も召諸博士陰陽師醫師者並餘人賜食及祿

と見ゆ餘人の上中務式小陰陽師六人を記せり此陰陽師を博士の上載せ

は供奉の職を諸師を同例も令私記問答問陰陽師其位博士其位而

作如此耳といふ違へり師は供奉の職博士は教授居陰陽博士之上若博士生不可相隔作

生を隔つ故小吏官位令正七位下陰陽博士七位下陰陽師階級まで定む記さざる

供奉の上陰陽式は九行幸陪從屬上率陰陽師之供奉と見ゆ 占筮は

陰陽の占周易の筮有り占は考課令占候註云陰陽日占灼龜目とあり占トは其術とあり

即ち大乙雷公の式をもて占ふ術なり大乙雷公の義極數知未は占筮並同其

筮の數をもて今の周易 夫易者極數知未者也式占の術は土辰土將土

事量家きさる四卦の數を極筮著を取て占ふ法あり著は草名小葉小用是を筮と名小負り

定言凶 相地は地の形を見て吉凶を言術なり說文小省視也觀地也有り俗小

紀四年是歲命卜者占海部王家地其絲井王家卜家相人相ふといふ相の義有り敏達

幸玉宮卜者陽者天武紀三年一月庚辰遣淨廣肆廣瀨王云云陰陽師工匠等

於畿内令視占應都之地桓武紀延曆三年五月丙戌勅遣中納言正三位藤原朝臣

小黒麻呂陰陽外從五位下船連田口等於山背國七訓郡長岡村之地為遷都也

ま皇陵墓の地と占ふは桓武紀延曆元年八月己未遣治部卿壹志濃王等六位以下

解陰陽者合十三人於大和國行相山陵之地為改葬天宗高紹天皇也天宗高紹

天皇は光仁敏達御代より始て見ゆ推古紀十年冬十月百濟僧觀勒の卷來

て教へ一方術の一術も有り此僧の事は曆博士の各条云へ漢藝文志

形法家者大舉九州之藝以立城郭室舍形人及六畜骨法之度數器物之形容

以求其声氣貴賤吉凶猶律有長短而微其声非有鬼神數自然也也見ゆ即

術を明らむ陰陽博士は學生を教授の職を有故博士といふ博士は和

名抄子波加世と訓り博士は多聞の義有り猶中務式給時服小陰陽博士一人

博士の条に云へ五

陰陽式九講書博士以下坐料組布端茵四枚長疊且三枚
並隔三年申省請受と有り曆博士天文博士漏刻博士も同例なり
陰陽生は学業

を受る生徒ふり陰陽式陰陽生十人其得業生陰陽三人取生内人とり得業
令後の制して聖武紀天平二年三月大政官奏曰陰陽得業生三人云云陰陽式
得業生撰性識聰惠令專精学其名申官給衣食成業年限依令未成業者不
得超入他色若未終業其師送外官者從雜令九取陰陽寮諸生者准醫學生
之終業と有り年限依令九年学館と有り云云
其業成年限及束脩礼一同大学生
先取て其次第度小及ふを云云
孝謙紀小

天平宝字元年十一月癸未勅云陰陽生者周易新撰陰陽書黃帝金匱五
行大義といへり此書を学ふ集解凡通例有師生者不得考只免徭役耳
とあり師の教を受る生は得考の色ありぬ例を云
學生業成て本省の試賦役令小
課り各寮の通例なり

國學博士諸學生並免徭役と有り在京の學生て徭役を免ふと有り
曆博士は曆を造り學生を教授の職なり皇國の曆術の始は欽明紀小

十四年六月遣内臣使於百濟別勅醫博士易博士曆博士等直依番上下
令上件色人正當相代年月日付還使相代と有りて
三色才俊を交替せぬ其同十五
術皇國傳む勅り

年二月小百濟國より別勅のまなく曆博士固徳王保孫を奉り
博士といは博識
の美稱を信ふる也
固徳は官名
あり此希小

紀十年冬十月百濟僧觀勒來之仍貢曆本是時選書生三四人以俾學
於觀勒夫陽胡史祖王陳習曆法云皆學以成業と有り
曆本は曆術推
歩の法書なり

代以前は其術を学ひ知るのみあり
曆を造る事はおもはるるに在らむ
持統紀四年十一月甲申奉勅始行元嘉
曆其儀鳳曆と見内異國の曆を用ひ給へる始あり
元嘉は宋孝文帝の代儀
鳳は唐高宗の代は洪
曆號文武天皇大宝年中も同曆法なる
令條より博士の職を置れ
教授せし聖武紀天平二年三月辛亥大政官奏曰陰陽醫術及七曜領

曆等類國家要道不得廢闕但見諸博士年齒衰老者不教授恐致絕業
望仰吉田連宜大津連首等七人各取弟子將令習業其時服食料亦准大
學生其生徒陰陽醫術各三人曜曆二人とあり此後同紀天平七年三月

望仰吉田連宜大津連首等七人各取弟子將令習業其時服食料亦准大
學生其生徒陰陽醫術各三人曜曆二人とあり此後同紀天平七年三月

學生其生徒陰陽醫術各三人曜曆二人とあり此後同紀天平七年三月

學生其生徒陰陽醫術各三人曜曆二人とあり此後同紀天平七年三月

辛亥入唐留學生從八位下上道朝臣真吉備獻大衍曆經一卷大衍曆文
成十二卷測影鉄尺一枚といへり猶下雜令 云云 曆生在曆術を學ぶ
弟子あり其員十人あり陰陽式曆生十人得業生二人あり

孝謙紀天平宝字元年十月

癸未勅曆生者漢晉律曆議九章六章周髀定天論といへり 九章以下の書は學術なり
天文博士推古紀百濟僧觀勒の天文地理の書を獻す時

書生大友村主高聰の天文遁甲術を學ぶ成業を得てより皇國は天文の學は
始り あり 天武紀四年正月庚戌始興占星臺といへり候望の處あり中務式

天文博士一人見ゆ 候天文氣色は天文の異氣性色を候望す 上陰陽寮條其

天文博士職掌唯言氣色風雲といへり氣色を奉るは風雲 口 つら を 知 る

下 とい は い ふ り き 説 く 此 博 士 は 天 文 氣 色 を 觀 職 て 風 雲 を 候 望 の 術 を 行 ふ

本條は天文博士の風雲の事なきを略けりといへり註を加へり天文陰陽其術 有異密封
異なり雜令より觀生不得讀古書唐六典天文博士の職も風雲の事なきを略けり

天文怪異を觀れり密封の奏狀を作券に申し本省送る 陰陽寮頭上奏聞事

本省は中務省 雜令より觀生不得讀古書其仰觀所見不得漏泄若有徵祥災異陰陽寮

奏訖者季別封送中務省入國史陰陽式は天文博士常侍觀候毎有災異日記者

加署封送中務省附内記内記附内記 九密奏料紙筆墨等臨時申省といへり密封の

奏事は機事といへり漏れぬ心志といへり 公令より九驛使至京奏機密事 天文生十

人陰陽式學生天文生十人得業生二人取生内人あり孝謙紀天平宝字元年勅

令天文生者漢晉天文志三卷薄讀韓要集といへり此書を學ぶ 云云

漏泄博士は漏泄の事を惣掌す 此職は博士といへり唐制は博士は漏泄の事 孝德紀小

大化三年夏四月制云 其制曰 有信者要於寅時南門之外左右羅列候日初出就庭再拜

乃侍于廳 臨 到午時聽鐘而罷其擊鐘使者垂赤巾 其鐘聲起於中庭見 見

は此時 職掌は置 置人 は 後天智紀十年夏四月辛卯置漏封於新基始 打候

時動鐘鼓始用漏封 此 漏封者天皇為白太子時始親所製造也 見 見 此 此 事 事 齊

正一人掌繪事謂畫文即繪彩色謂用畫之雜色即朱黛等之類其朱

黛等雜色在大藏省及內藏寮隨其用度臨時受用常不在此司貯之也判司事餘正判

事准此謂於神祇官既立條例自餘諸司所貫之而更有此文者贅詞重疊非有殊意

佑一人 令史一人 畫師四人 畫部六十人

使部十六人 直丁一人

畫工司は彩色の畫繪をよくをり匠を檢校の司なり檢校は支配司と寮を異ふるは寮は畫以上具る紋司は四分官の具るぬ曹司の號をいり寮は官令司は小官令と云下寮は頭助允屬あり

工漆部二司併内匠寮あり正一人は司の長官をいふ繪事は畫繪種々の文をいふ古ハ五采の色を用ひり繪の始は姓氏錄左京諸蕃小大岡忌寸出自

魏文帝之後安貴公也雄略天皇御世率四部衆歸化男龍善繪工小泊瀬

雅鷓鴣天皇美其能賜姓首五世孫勤大壹尊尊亦工繪才天智天皇御代賜姓倭畫師とあり雅鷓鴣天皇は武烈天皇此龍を始めふき欽明

紀十四年小天皇命畫造佛像二軀造つれと画宗峻紀元年小百濟國獻佛舍利云畫工白加推古紀十一年十一月小繪干於旗幟同十二年秋九月始定黃

書畫師山背畫師とあり此畫師は佛像の彩色をふと工を定められり平氏天子傳白加も同じ高麗僧墨徵能彩色をいり佛書を染め畫佛を莊嚴師畫文

圖也因畫物像也釋名云繪五采也和名抄小畫丹青所註小畫を畫文といふ

彩色をもてあやまるといふ文はあや即ち論語八脩繪事後素といふも繪は彩色
をまらモツラ專モツラ質素を後まきの義をいふる
其間以成其文と素を白色に見つるはひつ言ふ
たてて畫繪は色の豊かさをいふは故に五采を文をさす

彩色は五采の色あり

書紀神功推古持統彩色を志美乃毛乃志美は漆の義あり伊呂止流と点あり伊呂止留は色取
を義あらむ源氏物語須磨の巻に千枝常則と推古紀十年春三月高麗貢上僧曇

微能作彩色とあり此僧の彩色も佛を飾る具なり註彩色は畫に用ふる雜色より
丹朱青黛の類あり黛は青比雜色は大藏有する内藏寮に在り其畫に用

彩色をよめる職をて成斯く處ある内藏寮は別勅用物大藏月賦役令
一司を惣判とあり神祇官の條は惣判官事といふ小同例あり本註餘正判事准は餘司の正も

判司事准貫通の為あり
註神祇官の處は既に條例を立て自餘の諸司は是を通一貫く下す代
更小此文あるは其詞餘り重なるを殊なる意あり

の義を取れり字書小教員之端及言煩曰贅辭と見ゆ集解は此司最有諸司之始故立例令知職无別意と云り
依小佐小同小副職の名あり今史は孝德紀白雉元年賜公卿大
夫以下至千令史各有差と見ゆ今史は布年比止と訓り唐六典は諸司の記
畫師の畫繪の伎をもて供奉の人あり元明紀養老三年六月丙子令畫工司畫師

伴部は姓氏録小河内畫師繪工百倭畫師

始把笏焉とあり齊明紀五年小高麗畫師子麻呂といふ人見ゆ集解小長上畫師无位といふと官位令小畫師大初位上とあれ誤りあり
畫部は彩色を調ふる伴部あり神祇官の神部内藏寮藏部は同一部あり

内藥司

正一人掌供奉藥香和合御藥事 佑一人 令史二人

侍醫四人掌供奉診候 謂診驗也候望也言診驗血脉候望顏色也此診候者其醫

疾令所謂診候 醫藥事 其意少異也

藥生 謂此生即得考之人 十人掌搗篩諸藥 以自親供奉故也

使部十人 直丁一人

内藥司は御所典藥の官あり 内は外の典藥 文武紀三年正月癸未詔授内藥官桑原加都直廣肆賞勤功也とあり 日本紀畧小寬平八年内 藥司併典藥寮と見ゆ 藥香は御料の雜

藥薰香の類に進むるをいふ 和名抄香藥部小沈香淡香麝香丁子香薰陸香龍腦

賦役令小凡諸國貢獻云香藥彩色 諸蕃貢獻奇偉之物と大藏省に記せり此中香藥あり 和合御藥 は供料の御藥を和合せ進むるをいふ天武紀四年正月丙午朔外藥司捧藥進元日御進事 典藥式元日御藥白散一劑度嶂散一劑屠蘇散一劑云屠蘇者 干瘧藥病膏一劑

官人將藥生同日晦月午時封清御井令表司守元日寅一赴官人率藥生就井出藥即者輔一人並寮官人等持藥共入進置即用銀鍮子煖屠蘇 造酒供酒主殿設火爐 尚藥執御藥女孺昇殿令藥司童女先嘗然後供御次白散度嶂散三朝而畢

中宮東宮准此とあり 比御藥とも内藥司の供奉あり 後後典藥寮に併せられり寮の裏は典藥式と表裏一口長三尺三寸囊緒絲一兩東宮亦小緋表一口長三尺と見ゆ屠蘇酒治惡氣温疫華陀以此方典魏武帝作此酒及東蔡司侯護家用至有良驗名屠蘇酒といへ東晉より此名は起れり一説小唐孫思邈の庵を屠蘇と云ふり藥名と云ふと云傳ふは誤る一白散歲旦以温酒服五分一家有藥一里無病帶是散病氣皆消若他人有得病者便温酒服方寸匕也度嶂散辟瘴山惡氣平且以温酒服一錢匕辟諸毒氣と同式と記せり古より服用せしむら自餘御藥猶ある一皆數種の藥味を本方小しり 和合を俗に典

△此は通説を疑ふ之類也

藥式二年十二月造元日料自散四百十五劑令醫畏帖並書標題見は標題

方七記職制律小合和御藥誤不如本方及封題誤者醫絞疏云合和御藥須

先依處方合和不得差誤分而多少不知本方之類合成仍題封其上注

寫本方俱進但一事有誤醫師合絞按本草云藥有陰陽配合

肉有軍行者有相須者有相使者有相畏者有相惡者有相及者有相殺

者此七情合和視之當用相須相使者良勿用相惡相反者若有毒宜制可用相

畏相殺者不爾合用也御藥を誤は大本敬猶宮内省内膳司云

醫師已上先寄然後封印寫本方後具注年月日監藥者偏署名俱奏云然後進御

侍醫侍醫御所侍侍侍醫師侍醫師侍

侍侍醫師侍醫師侍醫師侍醫師侍

侍侍醫師侍醫師侍醫師侍醫師侍

侍侍醫師侍醫師侍醫師侍醫師侍

今天皇病未終發時病已差也古事記同段新良國主貢進御調八十一艘大

皇之病此後欽明紀十四年六月遣内臣使百濟別勅醫博士云官依番上下又

種多藥物可付送とありて十五年二月百濟貢醫博士奈卒王有陵陀採藥師施

德潘量豊國德丁有陀と見奈卒は王號施德固德はかく別勅て醫博士と喚

上給ふ侍醫仕る故あり孝德紀高麗侍醫を記せり皇國良醫おけ

依番上下文を考ふ孝謙紀天平宝小昔泊瀬朝倉朝廷詔百濟國訪求才人爰

以德來貢進聖朝德來五世孫惠日小治田朝廷御世被遣大唐学得醫術因號

藥師遂以為姓と傳あり按推古紀十六年九月以小野妹子臣為大使副唐

客遣之是時遣於唐國學生倭漢直福因高向漢人玄理云云とあり惠日の名

麻智洗爾末朝是時醫惠日福因等並從智洗等來之小新羅遣大使奈

舒明紀二年八月丁酉藥師惠日遣於大唐孝德紀白雉五年遣唐使副使大山下

藥師惠日とあり皇國の醫術は惠日より起るあり藥師は醫師と同義と久

其義ありに史記倉公傳診脈注云

其義ありに史記倉公傳診脈注云

註し診驗候望の義にて血氣動脈を驗考へ顔色を候ひ望むと云漢書の註より
云り漢書董賢傳に發棺診視注し診驗也とありて取て集解に診候者脈而不拘
此註より説文に診視也審辨也とありて取るるに
顔色といひ漢藝文志に方伎注し診視驗謂其脈及醫疾令請脈變者令迎診
候為脈生といふは生死の脈の支定を請故に脈生の診候を候はれ此条の診候其意
少異と云り供奉の官は尋常の診候より脈支と同かた
醫疾令は今の世に傳はれ集解に引用なり
雜藥をふ侍醫の專職は此二色小ありて周禮を按
るは疾醫藥醫食醫の名目も見えり

生は學生の生より同とされと醫生は異なり式部式に凡藥生十人之中五人取白丁
唐六典にも主藥藥童とあり
勘籍補之五人用入色といひハ二十以上まで重きはあらず
勘籍は戸籍を勘内藥の司に附るが
を得る人ふむ其身親ら御藥の事供奉の故なりといひ按て式部式に凡藥生等雖
不奉試而習合藥療治者侍醫等共奉申省任國醫師藥生優才は朝夕侍醫
病の事も習典藥式に凡行幸者官人入侍醫四人率藥生四人賞御藥從之と
ひ知るべきなり

見の大炊式に藥生十人日米八合右毎日料熟食充之なり典藥式に凡諸國所
送授業師料物勘納倉庫藥生料分充侍醫といへ藥生も殿醫生不同し
くきこの比考に内藥司を併せ供奉の官得考の例は上内藏寮諸手陰
掌る故に藥生の事も記せり
搗師諸藥は丹丸散膏藥種を臼杵搗き篩ふて篩は和名抄と和名布流
比除塵取細之竹罾也と云り典藥式に臼一口杵絹師二口別二尺と見ゆ寮家儲物小
鐵臼十口あり

内礼司

正一人正六下掌宮内礼儀謂門籍以内礼儀其外者式部彈正掌也禁察非違

謂若大臣彈正有非違者内礼不得直禁即錄所犯
申中務省省更大臣非違者移彈正彈正之非違者
申大臣各隨其状
迹迹相亂正也
事佐一人
令史一人大御下

主礼六人掌分察非違
使部六人直丁一人

謂主礼錄取所察之非違即
令本司知正之不可得輒禁

内礼司は宮内省参入官人の礼儀を糾正の司なり文武紀大宝三年正月辛未是日制

主礼六人元以大舍人為之宜准此例獨其課役と此時始て置り類聚國史

職官 大同三年正月壬寅詔云内礼司併彈正堂と有り 集解は同年正月二十日の詔と云り 宮

内礼儀は御所の宮門より閣門以内道路の 非法違例を教へ正

礼敬威儀を守らむと有り 又按て行道の礼儀 服用容顏等 文武紀に慶雲

三年丁巳詔云夫礼者天地經義人倫鎔範也道德仁義因礼乃弘教訓正俗

待礼而成此者諸司容儀多違礼義と有り 註小門籍以内は即ち宮門

内をいふ宮衛令五位以上著籍宮門といへり集解は宮内以内至御所按正臣下

違失之礼と云ら如 其外者彈正武部の掌る

朝堂内は式部省朝廷及

城門内其餘は彈正堂の掌るをいふなり 此同宮門外は預らば 禁察非違は臣

下の違失を禁の檢察のよりもし禁を犯せ其状を本省より申して執捕の

司より方々に教導のよりを教覺を改めざるは執捕し禁むべし集解は非違之輩先

禁む但犯状送省省送刑部事大者中務省直送彈正假令見闘殺者告衛府

可令繫不然者注状送中務と云へり 禁む禁止の義あり註は軽く見つて集解

天武紀十一年十一月乙巳詔云凡礼犯法者或禁省之中或朝廷之中其於過

失發處即隨見隨聞無匿弊而礼彈其有犯重者應請則請當捕則捉云

とあるは此司の事ありと云へり 其事をも重く彈 註諸臣を禁察は明らむと云

高位の大臣より礼彈の彈正の非違は内礼司の直に禁むべきと云へり 此司は賤位より

難此時も其犯法の有状を記録し省より申れは省より大臣の非違を彈正より申

る難此時も其犯法の有状を記録し省より申れは省より大臣の非違を彈正より申

送り糺彈せり（一） （移は文す） 彈正非違は大臣より申せり（各其犯状景迹を隨ひ

相違糺正せり（一） （上） 大政官より彈正糺不當者兼得彈之（一） （令） 彈正（左） （右）

大臣（右） 文よりかき壁をいへる（一） （彈正は大納言を彈せりと大納言は彈正を彈

のたゞ人をもちて 暁せり（一） 事字脱り令例より補せり（一） 主礼は礼儀糾正の主當の名

る（一） 聖武紀天平十年九月庚子内礼司主礼六人始把笏と有り 令

察非違は門内處令不分別居て官人の非違を視察をいふ集解主礼番上

人也一番三人を見ゆれば二人を両番とする制あり（一） 註は主礼の察祭と

其非違を記録 本司よりまけ知むのみより其身を禁るまありぬと有り

かく云は令察して林下察の職ありとれいふ（一） 内礼正度主礼の文記を以て省し申

へ（一） 朝は容易ふと云ふ如し 不得朝禁をいふを一本は不得朝禁朝不作なり

（一） 朝は容易ふと云ふ如し 不得朝禁をいふを一本は不得朝禁朝不作なり

（一） 朝は容易ふと云ふ如し 不得朝禁をいふを一本は不得朝禁朝不作なり

（一） 朝は容易ふと云ふ如し 不得朝禁をいふを一本は不得朝禁朝不作なり

（一） 朝は容易ふと云ふ如し 不得朝禁をいふを一本は不得朝禁朝不作なり

（一） 朝は容易ふと云ふ如し 不得朝禁をいふを一本は不得朝禁朝不作なり

（一） 朝は容易ふと云ふ如し 不得朝禁をいふを一本は不得朝禁朝不作なり

（一） 朝は容易ふと云ふ如し 不得朝禁をいふを一本は不得朝禁朝不作なり

（一） 朝は容易ふと云ふ如し 不得朝禁をいふを一本は不得朝禁朝不作なり

（一） 朝は容易ふと云ふ如し 不得朝禁をいふを一本は不得朝禁朝不作なり

（一） 朝は容易ふと云ふ如し 不得朝禁をいふを一本は不得朝禁朝不作なり

（一） 朝は容易ふと云ふ如し 不得朝禁をいふを一本は不得朝禁朝不作なり

（一） 朝は容易ふと云ふ如し 不得朝禁をいふを一本は不得朝禁朝不作なり

（一） 朝は容易ふと云ふ如し 不得朝禁をいふを一本は不得朝禁朝不作なり

（一） 朝は容易ふと云ふ如し 不得朝禁をいふを一本は不得朝禁朝不作なり

（一） 朝は容易ふと云ふ如し 不得朝禁をいふを一本は不得朝禁朝不作なり

（一） 朝は容易ふと云ふ如し 不得朝禁をいふを一本は不得朝禁朝不作なり

（一） 朝は容易ふと云ふ如し 不得朝禁をいふを一本は不得朝禁朝不作なり

（一） 朝は容易ふと云ふ如し 不得朝禁をいふを一本は不得朝禁朝不作なり

